

911.3

4

詩歌
美名分類抄

詩歌
連俳

異名分類抄

此書とてむらゝの異名と集流す
澄文をのせ誤哉乎一語とか一天地
神祇人倫居所器財衣食鳥獸虫魚
草木習悉く部類を分見安うじ
和弁連俳の便りなほし

神

物イヒニシラフなる事申しよ言通名あり

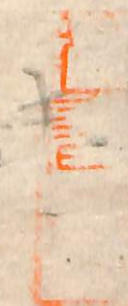
しる事あり名ありれ也道と一

しる事あり無下よラサナシ一少賢を

去メツラシキる事ありとあり

とありし月ありる事あり

よりありし事あり美ありにあり



ことし詞志ヨスカ因カ人カとふ用カの
 ありしはしり新ありとも
 旅もしてはしりあり
 ことし芳素し心ひきしり
 ハ中カ侍カよし群カしり
 其名ありしり

ことしはしり喜カをちりしり
 式カはしり先カしり
 物カありしり物カありしり
 ことしはしり埋カありしり
 ことしはしりアラシありしり
 松カのしりありしりミストラ健カ男カ

のさかすかおとすゝくはくはくはくはく
乃のさかすかおとすゝくはくはくはくはく
昔のりかきあちちのさかすか
糸くさくさくはくはくはくはくはくはく
江の川を釣くはくはくはくはくはくはく
のさかすかおとすゝくはくはくはくはく

あかあかあかあかあかあかあかあか
この世のりかきあちちのさかすか
あかあか

海味巻文

地之於異稱者
 肥前ヲ大ノ国ト云山崎川
 ヲ大ツク川トイフノ多クヒ
 地之於異稱者
 肥前ヲ大ノ国ト云山崎川
 ヲ大ツク川トイフノ多クヒ
 地之於異稱者
 肥前ヲ大ノ国ト云山崎川
 ヲ大ツク川トイフノ多クヒ

異名分類鈔卷之一目錄

虹 <small>ニシ</small>	雪 <small>ユキ</small>	霞 <small>カスミ</small>	松風 <small>マツカゼ</small>	東風 <small>ヒガシカゼ</small>	北斗 <small>ホクト</small>	蝕 <small>クサツ</small>	天 <small>テン</small>	十六日	天部
遊絲 <small>イトユフ</small>	霰 <small>アザ</small>	霧 <small>キリ</small>	雨 <small>アメ</small>	坤風 <small>ホシノカゼ</small>	流星 <small>ヨロイボレ</small>	明星 <small>メイセイ</small>	日 <small>ヒ</small>	十七日	日部
東西南北	雷 <small>カミナリ</small>	露 <small>ツユ</small>	大雨 <small>オホアメ</small>	乾風 <small>イノカゼ</small>	螢惑 <small>ケイダク</small>	夕星 <small>ヨヒノボレ</small>	月 <small>ツキ</small>	十八日	月部
稻妻	霜 <small>シロ</small>	雲 <small>クモ</small>	騷風 <small>サカシノカゼ</small>	牽牛 <small>ケンギウ</small>	風 <small>カゼ</small>	十五夜 <small>イハヒヨ</small>	後月 <small>ゴツキ</small>	十九日	後月部

△時節

十一月	十二月	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月
十一日	廿五日	廿八日	十八日	十九日	二十日	廿三日	廿五日	廿二日	廿三日	廿三日	廿五日	廿五日
夜	朝	朝	朝	朝	朝	朝	朝	朝	朝	朝	朝	朝
冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬
織女	秋朝	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋
夏主神	夏朝	春朝	春朝	春朝	春朝	春朝	春朝	春朝	春朝	春朝	春朝	春朝
春主神	春主神	春主神	春主神	春主神	春主神	春主神	春主神	春主神	春主神	春主神	春主神	春主神

星名分類鈔

天

喜撰式名見式ハ雲
ハ雲
ハ雲

神樂酒殿哥ハ書きせきの中よりそのまろくろがうらやま

久方れいもやのせきもあまなくんねりもよ吹まぐねせいのせ
とにねみち 於まきまら

後撰以いま

桐月つれきさのしらアそーう船きよのゆきハ徳るうしけ

日

あさひこ 六帖のあさひこのまやまのけりえのいしもま
らぬ意もまらぬ又まぬはまぬ云ぬえのぬうやもしうあはれ



○天アマハ十ツカガ蔭 推古紀歌云夜須弥志斯和我於朋考

弥能詞句理麻須阿麻能椰蘆訶磬云厚顔抄

日ヒはヒとヒなナりリわワといイつツ

○やたがらす 和名鈔云陽鳥歷天記云日中有

鳥赤色今案文選謂之陽鳥日本紀謂之ハ咫

鳥トリ田氏私記云夜太加良須

喜ヨ禰ミ石見

いイろロかカけ

あアまマひヒこ

月ツキ 月之別名曰佐散良衣壮子神中抄月

歌或云月之別名曰佐散良衣壮子神中抄月

名とのいひていかなるをけらる男といふ

以云世といは清浄の義洲ゆきふ神と云

語拾遺云阿那夜ヤケ 竹葉タケハ 潔ケツ 天武紀一身ニを

こハ神代卷可愛男コイヲ壯ツヨクをヲとトんンをヲ切キるルよヨむム

潔良壮子ケツラツヨクはハなナるル月ツキよヨまマとトもモ月ツキ吉キチ壮ツヨク子コはハらラつツなナ

つツよヨみミをヲとトこコ 万葉集一あアまマるル日ヒ中ナカ有アルとトもモあアまマるル

ひヒはヒんンとトもモあアまマるル日ヒ中ナカ有アルとトもモあアまマるル

つツよヨみミとトなナとトこコ 日ヒ集集第一十十八八秋アキ風カゼのノさサらラぬヌゆユふフとトもモあアまマるル

毎毎とトもモあアまマるル月ツキ人ヒトをヲとトこコ

かつらをとこ 袂衣よりつるまゝのことばなりしころとあり

と見えなむといふ
善撰 不見 秘藏抄 花玉抄

秘藏抄より朝敵へさしよるふらうの元とせ

おまひいしとせきんまのひまの乳

まつらゆゆこ 万葉集之二ありのけしうあきかえれは

弓そりくちやうしうみらよけむ 是間人宿祢大浦 初月

歌也

かつら 詞林採葉云 魚名苑曰 月中桂長

二百五十一丈 月輪内之有之 下有河 此木秋花開云

秋花之月の桂とまを候 秋花葉とまを候 以言 詩 桂花

秋白と白れは秋花候とまを候と云 月桂の花に

言津よりて秋をうると時一変極のふと八月桂名をとま

十五夜に後花

○もちくたち 美奈舟はもちくちとちと月桂の候とあり

十六日

いさよし 心せぬおよひの力ハ十六日し是深氏のをち

とまくとまをま揃花を云へるつとくと大内らハあしや入つとま

ぬきよひの力にまをまはしは是初月とまをひの力をし

ほんたれしうそを但しとよあ月のいさよしは力よあし

いさよしハ力結出んしてこのをまがしやまをいしとま

そ十七日の力をしとよ月とららへし又まをまよ云月のう

あまよみ竹とらへしとよ月の力を結とらへしとらへし

...の...
...
...
...
...
...

十七日

本因まね

十六日

...

...

十六日

本

...

...

十九日

ふーまら

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

ハ十九日勿論後再案ニ續き、よ坂上是則、おてけし廿日此方の
 まつらうとあひまゝと云いけつわきれやとあり。是は古きまはれ
 者として、三十六方仙の一人ともいれし人のかゝるまはれは、赤
 ましといふとも持てし、西流十九日廿日あはれと云ふ一、又六作
 三たをのこむさう、此れ力なむをやちうとて、いふまはれをせよ。
 契沖海は、此方によつて、十一日、此居まらといひ、廿日、此居まらと
 いふ、まはれは十九日を起し、終るといふ、まはれといふ、まはれ

明星

あろほし ハヤ 和名鈔明星 阿加保之 いほし 紫宮のめま

蝕 ハエツル 蝕 ハエツル 蝕 ハエツル

あろほしと名を、此方おま、あろほし、のろと名あり、にいとく
 帖、ハ、カ、ラ、申、し、見、え、れ、よ、ろ、ろ、あ、ろ、ほ、し、此、あ、か、ね、ら、ら、ハ、出、て、名

ホカ

たれとまほし 秘

小町

「あろほしと名を、此方おま、あろほし、のろと名あり、にいとく
 かえたれほし ハヤ 和名鈔明星 阿加保之 いほし 紫宮のめま

あろほしと名を、此方おま、あろほし、のろと名あり、にいとく
 せむといふ、まはれ

夕星

ゆふつば ハヤ 和名鈔云、太白星一名長庚暮見 ハヤ 於西

方為長庚由不十、中つともむふあ、地のいけ、こたよ
あ、と帳、日、さ、さ、く、の、た、ゆ、中、つ、北、け、と、八、ん、ま、せ

牽牛

○いぬかひほ志

和名鈔云、牽牛一名河鼓比古保之又、如加比保之

け、和名の意未詳

かそつバみ

一、果色葉、ま、よ、ん、ゆ、け、吳、名、和名鈔と、所、渭河鼓、れ、み、な、う、ん、

北斗

な、い、せ、つ、ほ、志

七、在星、なり、ま、ま、事、し、仲、正、系、意、ハ、な、く

ま、ち、事、し、の、れ、は、人、の、お、こ、ひ、を、え、よ、さ、な、う、な、つ、の、ほ、

さ、よ、な、う

流星

よ、ば、ひ、ほ、し

和名鈔云、流星一名奔星与ハ比保之、ま

あ、ま、と、へ、う、や、う、し、こ、色、み、そ、う、れ、よ、も、ひ、ほ、し、を、か、て

ひ、ろ、う、ま、う、な、

熒惑

ひ、な、つ、ほ、し

後、塔、より、是、い、く、と、ま、く、を、あ、ま、平、氏、太

子、傳、曰、敏、達、天、皇、九、年、六、月、有、人、奏、曰、有、土、帥、連

八、島、唱、歌、絶、世、夜、有、人、来、相、和、争、歌、音、聲、非、常、八

島、異、之、追、尋、到、住、吉、濱、天、曉、入、海、者、太、子、侍、側、奏

曰、斯、熒、惑、星、也、天、皇、大、驚、問、之、太、子、答、曰、天、有、五、

星。主_二五行_一象。五色也。歳星、色青、主_二東木_一、受惑、色赤、
 主_二南火_一也。此星降_レ化_メ為人_一、遊童子、聞好_テ作_二謠歌_一、歌
 未_レ然_レ事_一、盖是星歟。天皇_一大喜_ニ、夫_レ事_一、自_レ詔_レ曰_一、而_レ云
 皇_一御製曰、「ふ宿_二結_一のりつた_二のら_一を_レた_二り_一り_二なる_一の_二事_一、
 何_レ結_二子_一そ_レも_レと_レり_二り_一り_二雨_一あり_二号_一の_二返_一あり_二未_レ本_一結_二ち_一り_二南_一よりぬ
 くと_レれ_二は_一な_レら_二ほ_一し_二何_レ結_二子_一も_レと_レり_二り_一り_二此_一也_二と_レり_一、
 此_一なる_二ほ_一し_二ハ_一受
 惑_一星_二なる_一事_一、初_レと_レり_二り_一り_二主_一火_二星_一なる_二日_一ハ_二和_一洲_二火_一名_二是_一結_二我_一也_二、
 ツハ_二物_一語_二仲_一波_二を_一オキツナ_二こ_一とい_二つ_一の_二こ_一と_レり_二り_一り_二此_一ハ_二豊_一能_二なる_一、
 太子_一の_二小_一名_二対_一また_二子_一雨_二年_一九_二果_一、一_二説_一よ_二云_一、ふ_二宿_一の_二、_二云_一ハ_二神_一
 樂_一よ_二あ_一ん_二土_一師_二、_二傳_一う_二教_一なる_二こ_一とい_二つ_一、け_二義_一て_二我_一、又_二い_一ま_二を_一太子
 傳_一之_二秘_一の_二同_一え_二ま_一とい_二つ_一」

屈

在_レ撰_一る_二元_一
上_レ中_一の_二あ_一ひ_二く_一
 秘_一記_二ゆ_一ふ_二た_一つ

か_二その_一考_二結_一浦_二流_一なる_二ぬ_一よ_二う_一む_二ら_一ん_二と_一ハ_二法_一を_レ吹_二松_一の_二ゆ_一ら_二ら_一
 さま_二ら_一ち_二と_一ハ_二字_一を_レり_二ゆ_一ら_二ら_一と_レを_レ風_二を_レり_二ゆ_一ら_二ら_一と_レ

ハ_レ志_一
 志_一の_二、を_レふ_二、こ_一さ 備_一ら_二あ_一ら_二あ_一ら_二ら_一結_二志_一の_二、を_レう_二た_一り_二

ふ_二百_一の_二合_一千_二二_一百_二三_一十九_二書_一ハ_二志_一の_二む_一と_レい_二つ_一ハ_二結_一なり_二あ_一
 ぶ_二ら_一ち_二の_一志_一の_二、を_レう_二た_一り_二こ_一さ_二人_一を_レり_二ら_一ら_二、判_一老_二顯_一昭_二玄_一た_二方_一ハ_二
 備_一ら_二あ_一ら_二あ_一ら_二ち_一の_二志_一結_二、を_レう_二た_一り_二い_二つ_一あ_二ち_一は_二結_一なり_二あ_一
 なる_二し_一、志_一の_二、を_レう_二た_一り_二こ_一さ_二凡_一の_二名_一と_レ中_二傳_一く_二ら_一う_二下_一略_二果_一應_二惡_一
 案_一抄_二云_一、志_一の_二、を_レう_二た_一り_二ハ_二秋_一ふ_二く_一う_二世_一の_二を_レう_二た_一り_二こ_一さ_二結_一なり_二あ_一
 かな_二ら_一の_二教_一なり_二

志^ハまほ 貞徳云志^ハまほ 八風の名なり

いづく風かふとならむし志^ハまほとハ志^ハまほの風かふした
る哉いふそ堀川流るし「波かたつた」らとて記をわたり
おもむきしとせしむるもそとれ

を^ハちら ハて由抄云波神かふるを風しとてちらハ

迅風なり。風をチとよむハ東風。風本。是ふよとて人ハ

今俗をやてといふテとチ通言。夫本集為家ハ「波かたつた

沖の名てやけり。生田の磯よとていふ

志^ハまほの世 神代卷三曰。伊弉諾尊曰。我所生^ル之

國。唯有朝霧而薰滿之。我乃吹撻之。氣化為神。号

曰。波長戸邊命。是風神也。伴の神は名よりかたつた

け風よとつて悪風吹まらむし。志^ハまほの風ハ乾^カかたり

吹風なわといつ。中臣被云。科戸乃風乃天乃ハ重

雲乎吹放津事乃如久云。源氏朝臣をよわふらうらう

そのよははこみたるもの風よとてととの記はまほ集

和泉或記「あつた神は」といふ事ハ志^ハまほの風を吹

もちよはせし

ま^ハころ 藤原まよはは風の名とおまほとて記し。え真

集よ「いせの海はなを言こわつたあつた思ふとてえし

とまほとていふ事ハ志^ハまほの風ハ

も波の名なりやあり。又教本まほとおまほといふ事ハ吹か

とまほとていふ事ハ志^ハまほの風ハ

とてしるのふり人ほまをいぢしはのいりおんり
秘蔵 さらひかせ 東風 みの風

東風

あゆほろぜ 万葉十七「あゆほろいきとく吹ら」などの法士

由乃可是也 越俗東風謂之安

たよあぜ

東風謂之谷風 尔雅曰東風謂之谷風

坤風

ひかた 万葉十七「あひまきひびくふとく」

後之まきふ

乾風

あなま 万葉十七「あなま」

とてしるのふり人ほまをいぢしはのいりおんり

後合字

巽風

是土中名 神亦好 是佛行有甚好

松風

涼音子 松風之名 乃松風之聲也 松風之名 乃松風之聲也

雨

つみ 語可赤脚和名抄云 涼音八云 雨水也之水
是古之御體紀云 涼音八云

- ちりばた 名松水波之雨也...
- あまつみ 乃紫雲第一之雨也...

大雨

- ひさめ 垂仁紀 度大兩徒狭德發而來之 乃二長

雲

○まばくれあめ

本意は霧云、まはいやーと山人なる抱山

よ入る。まばくれあめ。いんぎよ。いんぎよのまばくれあめとて。まばくれあめとて。いんぎよ

雨ふりて。まばくれあめを。まばくれあめとて。まばくれあめとて。まばくれあめとて。まばくれあめとて。

本標 石見のまば

たよりしつ

れんごら まばくれあめ

日 ゆたけ まばくれあめ 考用し。流布本社因言枕新傳と写乃

秘症 まばくれあめ とて。まばくれあめとて。まばくれあめとて。まばくれあめとて。

まばくれあめ とて。まばくれあめとて。まばくれあめとて。まばくれあめとて。

霞

まばくれあめ

秘症 まばくれあめ

まばくれあめ 石見種福ふれをうたひひひとて。まばくれあめ

まばくれあめ とて。まばくれあめとて。まばくれあめとて。まばくれあめとて。

秘症 まばくれあめ とて。まばくれあめとて。まばくれあめとて。まばくれあめとて。

まばくれあめ とて。まばくれあめとて。まばくれあめとて。まばくれあめとて。

○まばくれあめ は標まばくれあめ のまばくれあめとて。まばくれあめとて。まばくれあめとて。

まばくれあめ とて。まばくれあめとて。まばくれあめとて。まばくれあめとて。

まばくれあめ とて。まばくれあめとて。まばくれあめとて。まばくれあめとて。

まばくれあめ とて。まばくれあめとて。まばくれあめとて。まばくれあめとて。

霧

まばくれあめ 保安二九年三月九日。保安二九年三月九日。保安二九年三月九日。保安二九年三月九日。

まばくれあめ とて。まばくれあめとて。まばくれあめとて。まばくれあめとて。

かみとけ 万葉ナニかそそ事能ひうほみそとよまへり。露
塵とちり。見あよなまらひ。序らなうわといふ

稻妻

秘名
こ、か、と

○いなつるひ 和名鉢よ一云伊奈豆流比之イナヅル嚴出

火なりといふと案よいなのみ能は注し稲のこくと山能端

能細くさうみしう能いやとあれと是と細くまら能イナヅル稲出火

と云々

虹

○のし 万葉十四いほろ能やさあのかてよたつり乃と

○のす 同そと能川の川能まきんくわらうなるとよあふ

かきとよあうがきとよの轉流し

○をふさ 万葉集十九云く雲よまらるる時らうとさふり虹のま

なれと西り上人「まらるる」を「まらる」に改むるは

まらるるかき能らうとさ能らまをんまをんを能を改むるは

しりふ

遊絲

○そらゆふ 万九そらゆふのかとれてまをんをんてしりふ

よあう契沖海云いそゆふしと

○かけろふ 陽カケル冬蜻蛉と同訓万葉十「をけろふ」を

名和も蜻蛉能ゆるとよと能うしりふのそを能て所謂

かきろふいまはるるを能て

○ひのたてひれぬき 日の經ハ東西なる。日経緯ハ東
 北。方一昔於青香具山ハ日経緯の○ハ其豆山ハ
 日経緯のとよなる。成務紀云。以東西為日経緯南北
 為日横

春 春辨 石見 △時節

春主神

さほひめ 壹系抄よやろ 頸略さほひの神より奉紀りて
 表を條る神といふ

春朝

秘府抄 春朝

秘府抄 春朝の事をなすむねを撰取の

夏

春撰 石見 かけろひ
春撰 石見 かけろふ
春撰 石見 かけろひく
 ハ西云夏の名し

○忠め 袖中抄より 忠を記述云云なることハ夏経一

名なるえし

夏主神

あろひめ

うつたひむめ 藤原抄より 春よりあろひむめを

日ハ夏経緯ハ花のまゝく 春日は神とす

〇つ、いめ 青葉おとせし

夏朝

つちまり 秘苑 花玉集同秘苑おしはななつたまのむら

秋

花玉集 花玉集の田舎に初音の歌

サハナリ 多霧の歌

さげさの

松因 あさよき

秋主神

たほしひめ 青葉おとせし

織女

さかよひめ 花姫 百子姫 袖のむら

織姫 握紫いめ 横姫

こと七夕に七姫といふ 宗祇 説は説文未詳

さかよひ姫ハ圓梳活法引開え遺事云ハ蜘蛛納之

小金盒中至曉開視蜘蛛絲稀密以為得巧之多

少云是明は季物流云姫蜘蛛とてさやあなるを能く

はくちまのあさひハおのひの糸を引ぬる残圖として私乃

わづかながへうとて伝事なるしまをさよよの成へし

花姫ハ公事根原を巧真之机の上より火とるにふゆを

見しとておとせし事文類聚云女郎呈巧焚香列拜

百子姫ハ歳華紀麗注云七月七日臨百子池作樂

素瓶云大園の禁中云ハ百子雲物炊そるへく水を入瓶に流

一ツ 秋五ノミナトニシテハシメテ「神ノミナト」ト云フ
ミナトノミナトトシテハシメテ「神ノミナト」ト云フ
并内侍ハ「秋五ノミナト」ト云フ
何カノミナトナリト云フ
其ノミナト皆ハ神ノミナトト云フ
水トシテ「神ノミナト」ト云フ
皆ニテ神ノミナトト云フ
事記云「今天棚機姫神織神衣」ト云フ
「機姫」と云フハ「機ノ字」ト云フ
七姫機姫あり又「机ノ字」ト云フ
なり。ミナトニ

秋朝

秘花藏玉
こなけつ 秘花藏玉ノミナトト云フ

冬

春探
こなつゆ 春探ノミナトト云フ
た、ま、く、し、け 春探ノミナトト云フ

冬主神

○らつたひめ 冬主神ノミナトト云フ
一考ハ冬主神ノミナトト云フ

○志らひめ 一書云「青女司」霜日志良姫佐保姫葉
守神立田姫志良姫已上四季玉女

冬朝

秘苑 花玉
ゆたけつ へんくろよふかそてんれはふち秘苑もまてくよゆ

曉

未撰 たましくしけ へんくろよふかそてんれはふち秘苑もまてくよゆ

能因 じやをしけ せはくのまぢをまてくよゆあへん

いゑなぢめ 契沖師云。秘苑の細さしく心の結の細くまてくよゆ

まのまじりうとく。教通とよ小竹。月の表もあへん。一カ十

「あひまかくはささくねも秘苑の目結のよまてくよゆあへん

紙箱 なしめ

ひまと 秘苑およふかそてんれはふち秘苑もまてくよゆ

乃ひなとまてくよゆあへん。秘苑の目結のよまてくよゆあへん

妹殿

ゆるけりやとまてくよゆあへん。秘苑の目結のよまてくよゆあへん

○かもたせとまてくよゆあへん。秘苑の目結のよまてくよゆあへん

そりかもてれ対とハ。彼者誰ぞとはのうにえんけり

をいふたそり対とてを同じ。つとまてくよゆあへん

いまもひかもてれハ。秘苑の目結のよまてくよゆあへん

朝

未撰 たましくしけ へんくろよふかそてんれはふち秘苑もまてくよゆ

はき 奥殿 たましくしけ

未撰 たましくしけ へんくろよふかそてんれはふち秘苑もまてくよゆ

夕

未撰 たましくしけ へんくろよふかそてんれはふち秘苑もまてくよゆ

○あれはたせとさ 係氏初書きて。女風のどくうらまひ
きよおまへに梅のうらひもささるむ。いかにかたをたるといふ
そときそつれ時といふまよひ

○むつうちとさ ちかて梅は口決よとたさのさ時

「さよひにさしてふせと梅の花のうらまひをささるむ」といふ

昨夜 休 したよ

昨日

○さす 仁徳紀昨日とよあり。崇神紀も昨夜もたな

—くうめ

○さそ 万葉集第二。かたさる人そさその夜まよひは
くしよあり。第十回よ。さそもさよひもといふ

△十二月異名

正月

秘 鏡 影 さみとる月

いそるくささる月よなるぬさハあまなりし小ねひさ月の○

真 傳 傳 くれとる月

「影」新力ちよかすけらむ初学結まきく見ささるうらまひささる○

さ くれとる月

「梅もささるうらまひなるぬ年知力名もめつてく感よんトリハ

梅王 曉 梅 けつそらる月

「香ハけふささるうらまひささるうらまひささるうらまひささるうらまひささる

かきみそめ月

二月

「くもれん凡さむとふと書結その名なりやかきあ初月
むつはな月

初月は

子日日月

「うらみさ初月力れ初日親乃とととさやあふとゆわ

秘飛
むめつさ月

「うらみさのひよとぬ里親高とあうし花さうつたす梅つさ月
ゆさ、え月

秘飛
むえづ月

「かえ結智んきしむ梅月い決とんすも月白よとと
むめみ月

「とふんもなささ古々の梅見月風乃なるを神くささ
をくささかひ月

「さうらなうらなうらあうし小まけ力結ささむさし
本月力 所あいまうかうつさ一葉の色を葉とふとさう

一葉を産お額田歌さうさりお里力人ともさ

三月

秘飛
ささをなさ月

「古マへへもゆらうらうらうはまなをさうりさやなうぬ
もなつ月

花は力むよりほれ名のあふむじりゝ家ハ神ぬをく
ゆめみ月

日 月 床ちうちうさつせのほれまえ月あつゝはまがらの音れ中音
そなま月 曉草池日一

飛去 かくら月 一ととをうたをひらの花え月なてゝららとあつたぬむ
かくら月

日 かくてら、あうめとみそて楓月うもつりさう四方結らめ
それをしみ月

一色 一をなうぬ身ともねもらつ日と三よふねのえのま惜と力
まめいろ月 花ちぬぬ

四月

秘書 こと結とと月

美作 いろていかなうこととと時をこのまらう月とたはまぬ人
このそな月

日 友かり結うと誠法のまらと山所め花月と行をいそし
なつと月

飛去 暁草池 いろととと月 いろととと月 いろととと月 いろととと月
いろととと月

日 いろととと月 いろととと月 いろととと月 いろととと月
いろととと月

一色 いろととと月 いろととと月 いろととと月 いろととと月
いろととと月

五月
初月
二日
三日
来月

以上一景も紫葉の裁を記す

五月

秘蔵
三つと月

「池を渡る」といふ事一歩のあやさう 常にかきつゝもいそ

秘蔵
男 梁月 暖筆池云はつのをよか

「いづれかして 養山 芝をまゝして 杉入はほほほめむ力あの上

つ 三つと月

「いづれかして 養山 芝をまゝして 杉入はほほめむ力あの上

た ちをな月

「いづれかして 養山 芝をまゝして 杉入はほほめむ力あの上

吹 五月

「いづれかして 養山 芝をまゝして 杉入はほほめむ力あの上

つ いろ月

む ぬれいろ月

六月

秘蔵
い くら月

「いづれかして 養山 芝をまゝして 杉入はほほめむ力あの上

七月 づれ月

「此の 吹く池なるをうけいつなる 涼氣有るなり」といふ

「此の 吹く池なるをうけいつなる 涼氣有るなり」といふ

「此の 吹く池なるをうけいつなる 涼氣有るなり」といふ

「此の 吹く池なるをうけいつなる 涼氣有るなり」といふ

「此の 吹く池なるをうけいつなる 涼氣有るなり」といふ

七月

秘記 めてあひ月

初 ちやくしれかね 材鐘六月律也。呂氏春秋注曰。林衆鐘聚陰律也。陽氣衰陰氣起萬物聚而成竹管之音。應林鐘也。

「此の 吹く池なるをうけいつなる 涼氣有るなり」といふ

秘記 せよあひ月

「此の 吹く池なるをうけいつなる 涼氣有るなり」といふ

秘記 あひあひ月

「此の 吹く池なるをうけいつなる 涼氣有るなり」といふ

秘記 せよあひ月

八月

たまはらか
かれきにあまのさきくひかきしむなみつたげに
たごきしうめはしとらきさたてはらさし
をになしは

たごきしうめはしとらきさたてはらさし
たごきしうめはしとらきさたてはらさし

おろ、をなさか

おろ、をなさか
おろ、をなさか

おろ、をなさか
おろ、をなさか

九月

おろ、をなさか
おろ、をなさか

おろ、をなさか
おろ、をなさか

おろ、をなさか
おろ、をなさか

おろ、をなさか
おろ、をなさか

松尾
いろどる月

「昔傳」
いろどる月
いろどる月

「昔傳」
いろどる月
いろどる月

「昔傳」
いろどる月
いろどる月

「昔傳」
いろどる月
いろどる月

「昔傳」
いろどる月
いろどる月

十月

「昔傳」
いろどる月
いろどる月

「昔傳」
いろどる月

「昔傳」
いろどる月

「昔傳」
いろどる月

「昔傳」
いろどる月

十一月

しんせつ
ゆいこそと結を月

英傳
ゆいこそと結を月
[後] 結を月乃を結なるむとらけまけよそなるわらうら

かみ
みさか
[前] 結を結有といひたう一かきそ一と結をいひたうら

巻五
とふと月
[日] 方よとあつて結の神を月あつたといひたのこやあつた

小日
ぐら月
[日] 結を結有といひたう一かきそ一と結をいひたうら

ゆい
ゆいこそと結を月
[前] 結を結有といひたう一かきそ一と結をいひたうら

[後] 結を月乃を結なるむとらけまけよそなるわらうら

十二月

としよつと月

英傳
古月
[前] 結を結有といひたう一かきそ一と結をいひたうら

おわ
わこ月
[後] 結を月乃を結なるむとらけまけよそなるわらうら

巻五
とふと月
[日] 方よとあつて結の神を月あつたといひたのこやあつた

「三行をゆくといふ身、さき老なれと表行力いそ〜地を
めとつ力

「たさるるは心む枝うやほのんして梅初力結るるいそ〜
ふゆ力

「たさるるは心む枝うやほのんして梅初力結るるいそ〜
と〜つみ月 花さき〜

かこりた月 日

長門 百濟 紗羅林 地五 不二山 日光山 山ノ端 巖
肥前 新羅 冥途 地震 春日山 加茂山 峯 島
九州 加賀 高麗 三途川 山 多武峯 鞍馬山 谷 礒
備前 田舎 世界 極樂 須弥山 松浦山 三輪山 谷水 高岸

異名分類録卷之二目録

△地部

- 日本一
- 長門三
- 百濟四
- 紗羅林四
- 地五
- 不二山六
- 日光山七
- 山ノ端八
- 巖八
- 大和二
- 肥前三
- 新羅四
- 冥途四
- 地震五
- 春日山六
- 加茂山七
- 峯八
- 島八
- 九州三
- 加賀四
- 高麗四
- 三途川五
- 山五
- 多武峯六
- 鞍馬山七
- 谷八
- 礒八
- 備前四
- 田舎四
- 世界四
- 極樂五
- 須弥山六
- 松浦山七
- 三輪山七
- 谷水八
- 高岸八

龍八

海十

山崎川十

波土

度潦土

畠土

天神十三

海神土

道祖神土

形代土

湖八

川十

角田川十

泥土

橋土

石十三

△神祇十三

地神十三

水神土

道神土

水八

紙屋川十

名古屋園土

溝土

野土

破土

天一神十三

土神土

木神土

氷九

八幡川十

廣澤池土

堰土

道土

山神十三

火神土

産靈土

△人倫十五

仙洞十五

后十六

宰相十六

六位十七

左右衛門十六

百姓十九

夫十九

前妻十九

我十九

孫十九

春宮十六

大臣十六

中將十七

大夫十七

左右兵衛十八

番匠十八

前夫十九

後妻十九

兄弟十九

從弟十九

親王十六

公卿十六

三位十七

隼人十七

侍從十八

男十八

後夫十九

三女十九

嫡子十九

姑十九

中宮十六

民ア卿十六

四位十七

左右近衛中將十八

民十八

女十八

妻十九

夫被遺棄女十九

仲子十九

親族十九

老人 カニ

俗 カニ

海人 カニ

圉人 カニ

婢 カニ

乞兒 カニ

古人異名 カニ

佛 カニ

命 カニ

腕 カニ

月水 カニ

脚氣 カニ

飼飼 カニ

疱瘡 カニ

夢 カニ

老女 カニ

山伏 カニ

漁翁 カニ

屠兒 カニ

傀儡 カニ

心 カニ

髮 カニ

脚 カニ

淚 カニ

腋下毛 カニ

黒子 カニ

痘痕 カニ

玉莖 カニ

童 カニ

朴人 カニ

相撲 カニ

乳母 カニ

遊女 カニ

思 カニ

小腹 カニ

脚 カニ

病 カニ

疝 カニ

癩 カニ

吐乳 カニ

吉舌 カニ

僧 カニ

盜人 カニ

獵師 カニ

奴僕 カニ

流人 カニ

息 カニ

指 カニ

躡 カニ

瘡 カニ

癩 カニ

疹 カニ

灸 カニ

死 カニ

異名分類鈔

日本

△地

豊秋津洲

神代卷より入たり而神武紀ニ云

廻望國狀曰猶如蜻蛉之醫占焉由此始有秋津洲

之号也云々 志々巻ハ神代卷より出たり其後の名始

より見たりたるを記へし 雄略天皇御歌より

阿岐豆斯麻野麻登と云へく其外糸系より云々

よあり 夫木集 為家 秋つしよんはくろふ種と

してかよふと云ふぬやまやことれ也 又秋津國とも

あるへし 為相御 崎の介もたを云ふまきり秋津國

より道にるるを云ふと云ふと云ふ

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 正皇天, 海城, 山崎, 津手, 秋津, 武紀, 神代, 廻望, 國狀, 猶如, 蜻蛉, 之醫, 占焉, 由此, 始有, 秋津, 洲, 之号, 也云々, 志々, 巻ハ, 神代, 卷より, 出たり, 其後, の名, 始より, 見たり, たるを, 記へし, 雄略, 天皇, 御歌, より, 阿岐, 豆斯, 麻野, 麻登, と云へく, 其外, 糸系, より云々, よあり, 夫木, 集 為家, 秋つしよん, はくろふ, 種と, してかよふ, と云ふ, ぬやま, やことれ, 也 又秋津, 國とも, あるへし, 為相, 御 崎の, 介もたを, 云ふまきり, 秋津, 國, より道にるる, を云ふと云ふと云ふ

あしそくしんちの國 古史記豊葦原千五百秋水穗之地と云へり 葦葉集よりあしそくしんちの國と云へり 日本紀竟宴歌

引いふ秋の國をさそくしんちをのこ方代今もよとれり

浦安國 神武紀より云へり 夫木集より

波まてつるさそくしんちをさそくしんちを浦安國と云へり

細戈千足國 是も神武紀より云へり

磯輪上秀真國 同記より云へり

玉垣内國 是も同し夫木集より

玉垣のうらつ所國に於てとて是をさそくしんちを玉垣内國と云へり

神代巻より葦原中の國と云へり

大八州國 日本記竟宴歌

神代巻より大八州國と云へり

あしそくしんちの國 神代巻より大八州國と云へり

あしそくしんちの國 神代巻より大八州國と云へり

あしそくしんちの國 神代巻より大八州國と云へり

あしそくしんちの國 神代巻より大八州國と云へり

あしそくしんちの國 神代巻より大八州國と云へり

あしそくしんちの國 神代巻より大八州國と云へり

あしそくしんちの國 神代巻より大八州國と云へり

あしそくしんちの國

あしそくしんちの國 神代巻より大八州國と云へり

かといの取末を八神やてこそ
あめほちかかゝる國 万北に免はちのかかめしめそや

と一はぬはとよあり

神國 神功紀云東有_二神國_一謂_二日本_一云々 夫木

神皇正統記云云 天孫降臨 天のまをり八かき

たのよや

とくくや万の玉 万第一雄畧天皇御製

とくくや万の玉 万第一雄畧天皇御製

又とくくやとはうもいふべし 日本記竟寧歌

とくくやよはまはいふふくくくくくくくくくくく 是ハそくくく

とくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

○五針道河流國 流古今集 大上天皇

久くはあきつるを玉津のたあつあそ今れま

○秋津羽津姿の國 續後撰集

○秋津羽のそとれ國 久々れれ神のまをりやま

○藤根れ國 言塵集よこゆ

○内本綿之真途國 神代紀よこゆ

○初國 秘中抄 且三國古谷古辭

ちまひられ玉

ちまひられ玉

大和 ○うひ子れ國 性靈集益田池碑之銘云 粵有益

田池兩尊皇子之州八鳥初導之國 注云初

産之州大和國也

九州

○和中はく此國はく香の崎より

和日木紀白筑紫洲此地形如木兔之躰故名

之木兔鳥之名此云都久

備前

○吉備キヒ前中後且三國古名吉備といふ古史記曰

○古史記日本紀等キヒ和名欽備前キヒノ備中キヒノ備

○後後キヒ後キヒ

長門

○穴門 垂仁紀穴門古史記穴戸天智紀始長門といふ

肥前

○火國 前後本為二國景行記云十八年夏五月從葦北

○光發船到火國於是日没也夜冥不知著岸遙見火

○光天皇詔按取者直指火處因指火往之即得

著岸天皇問其火出處曰何謂也也國人對曰是

八代縣豊村亦尋其火是誰人之火也然不得

主茲知非人火故名其國曰火國

是等事たるは

あは

加賀 ○よろこび

散木集ふ加賀守

堀川院次良百首

田舎 手標 いま

つ穂のかくまぬ

百濟 八 くだら 日本紀訓也神切紀

新羅 シラキ 仲哀紀より 宗神紀ニ鶏林ともあり

高麗 コソ 神功紀より

世界 金葉集より 佛と云ふも亦其

からちよやと云ふは海を漕ぎ渡る人

沙羅林 サラク 佛滅所也 事あり 釈尊涅槃に入ると其

樹即時に衰して白く白落のことなり

冥途 ミヤツ ことし

よとつ国 ヨトツクニ

神代巻ニ黄泉

よとつ心 万十つ いき一あのみみのうらみい

とていひの心は志はひはかた 契沖の云生死

よとつ心 此岸とて 涅槃とて 別有とて

とも四聖法彼岸とて 其間を海とて なる深

して底なく 廣ふして かならず 生死あり 海

まこと いたとて 壇于山 涅槃とて 朝の葉

たてさせしもの へは いはれは 是彼岸あり

よとつ 金葉集第九巻に 國黄泉は 雲ふとき

よとつハ 圖あり 今俗もよとつとて ころなり

いへ

三途川 ○ころねちとせ 大和物語より けぞふはかくて

やとぬ あうきちれふちせ 河たれよとて ころなり

注云 ころきちれふちせとハ 三途川なり ころなり

○まろ川 古今

極樂

法苑珠林雨と云くなんじり川ありてなほわたりて
とく地道 源氏推古本の巻よすよ心とあり玉りわと
あつちのそをたむとあやせはとく一たるとよあつむと
あひねへさかき

地

志すね 未標 八雲よままのの 徳園日記

地震

推古紀云七年夏四月乙未朔辛酉地震舎
屋悉破則令四方俾祭地震神云地震の神
とふる有威へ

山

播磨高破と混とへうけよつた山
まゆといふ山積成山といふ本文よ

後撰集よ素世法師花よりてよめる歌

引守といふ山尾上のさく折るかきん

是よくまへ

八雲よ日本紀よやまがむきといへり

むきとよむ山 神功紀欽明紀をよる

八雲云山はたうけぬ云一説未弁

預弥山

○そあいろ山 新譯撰送廬山云拾玉集云折 そあ
いろ山の山をよむ其國なり其中うを南膳部州と
く佛の出のふ國あり云雪玉集

富士のひんたふよやくんはそそのあいろのこ

富士

藤嶽

鳴澤高根 常盤山 塵山 二十山 三重山

新山 見出山 三上山 神路山上

羽衣山 四季なる山 東山 雲霞山

未通女子山 たけやう山

鳥子山 國孫溪山上

春日山

若草山 極物よらうと 春日あうとらう

和州幽考より美草山と俗よはらうとらうと云々

和州より並らうと云々 可考曾丹集より

春日山と美草山と云々 此れはたけやう山と云々

多武峯

紅葉洞 玉葉集より 月夜かきたうの色へておぼ

和洞の月夜さう色よ 此れは美草山と云々

和洞の月夜さう色よ 此れは美草山と云々

法修行して往生がまけまへへきと云々

肉陳よりかくまへへきと云々

かきたうの山いつくせも云々

かきたうの山いつくせも云々

松浦山

領中摩山 万葉集五 此れは川人すうと云々

此れは川人すうと云々

此れは川人すうと云々

此れは川人すうと云々

此れは川人すうと云々

日光山

性靈集云 粵右同州補陀洛山

注曰 旧名二荒山改 日光 吳音相近也 又云補

陀洛和語相近也

加茂山 ○神山といふ 狭衣二

神山に志ひは紫かきまきのうらふきさかからぬきのうらふ

鞍馬山 ○くらぬふ は鞍馬山にぬくぬふといふ 幸八うつ不物

慈忠古曾の巻春日詣にきよくまうり予別記委

三輪山 ○こむろ山 は三輪山にぬみむろ山といふ 幸名所補遺

披ふくけく幸長らきうと累と其書を披てきうへ

於之高市郡ふるこむろ山にうらふきい雷に岳と云

幸八雄畧紀よりゆ

○神垣山 後撰集八

外平根神垣山のいふこと

古今上 神垣山にぬらるるの神垣山にぬらるる

ひらり 是が神としてきうへ

山端

秘蔵抄 おもむきと 秘蔵抄よむきとくつとつとつと

羽取の月入るうらふかとくきうのにおむきとくつとつと

おもむきとくつとつとつとつとつとつとつとつとつと

峯

秘蔵抄 さちほの 秘蔵抄よむきとくつとつと

はくそ 秘蔵抄よむきとくつとつと

たけとも 秘蔵抄よむきとくつとつと

谷

秘蔵抄 いとくた 秘蔵抄よむきとくつとつと

流のこそいなるたけともたけともたけともたけとも

谷水

○たよる 他覚抄よ谷なる谷水なる水を物をとく

水

○いあきういふき... 方々長流よ、月日のまじりて天雲の

島 巖

本橋
よそねーは 石見の言よまー

日るえ
ま川ねひ

いふち
ま川ね

日
ひこいー 俊頼叔ま

本橋石見
ちるふと

日るち
あふそね

日るえ
まくと

日るち
ころーま

水 湖

○こもひ 異行記...

こもひかこむといふ

○をりや 未詳まう 小艇をよこせうかると傳ひ

平ら流りよるこいせへい... せいのてん

へまうねといふ... 中れまさい... かんこせ

まなゆが人かくまう... 今俗上人かおるくまう

て水もとあまふもゆるゆるわといふも是等好送

流まうへー

○野守れ鏡 野守ら有る水かいつう神才叔云むうー

雄畧天皇と申帝狩りぬひりねし所鷹をれてこ

を野守のあひてせいきらるゝ所鷹けき所かういふう

てかくせううまハヤそとせはせぬひりまは此の水と親

氷

莫傳

うほつて侍きハ巾より素一なるより世にさる水とせ
守能かこともハハ侍人たるまゝ界童抄抄大同小異
[一] 卷五に御守能境をて一まのひあるハまよそなうとて

仙覚説氷面鏡能事あり 詞林採葉云ひも凌と
ハ氷なるいつきも凌よ物とてかこし似たること
但一万葉能於よおのてハ莫説まときへ一燭明抄

よ委

上 けいー

望 せぬ

海

○あら 仲哀記云遙望之大海曠遠而不見國
○やら 美奈末 けしたその能水のやらとよめ

ヤトア通て海をいづ 契沖説

○もろ谷のぬし 新撰云 懐よ 百谷のぬしといふ

海をいづるをいづるのそむくそまら

川

きん見

ちやたつ 八雲御抄曰 堀川院百首

淵流をもとこせもきぬとや川の流るる川のまらハ

紙屋川 ○らうと川 大嘗會假名記云 荒見川能くへと

紙屋川あく上卿以下糸向て候事つくと

幡川○なまこ川 行乗の古今圖書序に八幡川河渡

山崎川○たさ川といふ 重之集よ山崎川河たさ川といふ

かつこくちとて

志の波のたさ川河もさう後くやれと申候なり

角田川○あさこ川 更汲日記むとさかの才あては

さこ川といふ 在五中將此いさこやんといふ

さうらう中將此まうさこ川とありき 名所

の山野河海うやれたくひくも有るへ今こ

をほくさを但し挑川ハ泉川と船く梅豆羅河松

浦と云、古名は時ふく吳名ハあ

なまこ川関 ○よりなくの関 法が納まよありて関下を

いうよあもいへたる人それ城名こすれ関とい

ふよああんとさ名古曾れ関の吳名う

廣澤池 ○大沢もいふ大沢ハ古名なり大和物語よ監命婦

大沢の比の水くれとをぬも傍ううんさされつてハ

波 香標石見 ちまくらし

秘伝 ささくぬ

奥義 ゆうさ川

なごろろ 大波はり註ハ関の下まゆ

○ひちまこ 和名鉄土和水电也 和名比知刺古 又云古比古

○こひち 源氏よ 神あさこひちとからあさ

泥

石

かたの結うこもよまひふろ 枕葉まつりのはり〜
玉うらも 堀川院百首 新波江の藻ようつら

玉うらあつらまてまよふ人成恋もや 色葉和難よ云
色ようつらまて玉うら石をよ玉八ほむる詞こま

いととらうは

ほむし 景行紀云十二年次于拍岐大野其野有

石長六尺廣三尺厚一尺五寸天皇祈之曰朕

得滅土蜘蛛者將蹶茲石如拍葉而舉馬因蹶

之則如拍上大虛故号其石曰踏石

ほむといふ是なるいともうら玉かゝるを石城か

○いく子 日本紀云神天皇祈之 石城かゝる

なりといふともま 秋日本紀云くま石也い

助後なるといふ

○みなむら 神中抄いなむら石系下よ水の下の

石城なるむらといふ

○なるを 武烈天皇歌よ之廢世能能儼鳴哩鳴

師説謂畧

△神祇

天神 ○あまのりやう 和名鈿天神 和名雲方豆夜之呂

地神 ○くまのりやう 地神曰祇 久尔豆夜之呂

天一神 ○なるかゝ 和名鈿云天女之化身也 源氏

此神... 神の有力... 中神長神兩設なく

○一板めくると神 金葉集よ...

紫和羅と王相と一板くよハ... 神といへう大和物語も此神... 神一板めくると神といへう天一神のま...

山神... 神代紀... 神代紀... 神代紀...

海神

○... 命... 神のま...

水神

○... 神代紀生水神象岡女... 和名鉏云水神... 年中行事歌合

土神

○はよ乃娘 神代紀生土神埴山姫... 埴山姫

火神

○かくつち 同紀火神軻遇突智... 今俗物の集... 臭をかき...

火神

○ほのむそひ 又云生火ホムスヒ産靈為子所集ホムスヒ

道祖神 ○さへれ神 和名欽云 風俗通云 共工氏之子好遠

遊故其死後以爲祖和名佐倍 乃加幾

○ひきもれ神 母之集あひまうなる人れ物へりよぬ

さむるとて けふもかへらんやまのひきもれ

〜成りのきとを思ふ 玄旨云云ひきもれ神道祖神

道神

○たむけれ神 和名欽云 乃始曰 たむけ

君也思ふふいさうとぬきたむけれ神

○ちふれ神 ちふれとて道を守り神也 母之形也

はれよひは道とすともむと姓氏録云道守也

よまろへ海はよもよむへ 土佐日記云

川海のちれ神よむとぬとの道内なるきふとん

木神

○くけれ神 神紀木神号句句廻馳キト

十五百番寺合 くれの神とていふなれとあささくれ花とさうと

産靈

○むそふの神 奥儀抄云むそふの神ハうふの神なく

産靈と書見云 和名抄産靈血曜比 乃加幾と有り拾遺集

毛モウむそふの神とていふなれとあささくれ花とさうと

何花集云 けふもかへらんやまのひきもれ

けふもかへらんやまのひきもれ

形代

○もろへ集 宗祇云

一宮川よよねわの田のまじり

△人倫

洞

この山の 莊子曰 藟姑射山有神人居之 仙

洞と稱し なるようまのいふなる人 拾遺集

万代とせむかきにはたのむまはくつのはりてん

よもさの洞 是又はたこれ多之朗詠蓬萊洞

月照霜中又へそそ

○たぢり死舟 童蒙抄云 天位のを戒を今捉ぬ

皇と太上天皇をむるたふと力ま 倒吉の神

もさきーと思ふくむるま 成りてさるい後

拾遺集ニ条院所載ノ書後

此同くろくしるるまよ 依抄

春宮

あさきさ 春を昔帝青律なるといふがくろく

仲尋未幼

かまけ池

枝の花 此花非是人間種 瓊树枝頭第一花此句の

ころろろろろ

○井の宅 漢武帝に御子梁孝王に井の宅ありか

くつとといへる夫木集より 年経経くけろふ井の

室のろろろろろろろろろろろろろろろろろろ

中宮

秋のま 拾芥抄より 中宮長秋宮より 夫木

かまはるる乾とたへて秋のまをさるるのまの子代もあらん

台

おほきさねのち

中

おほきさね

と臣

おほきさねのち 夫は かけなびく ちのち

おほきさねのち

おほねく

ほの階 階恐ハ位ノ字を誤ちん夫亦未ナ

大長次 代をてをかけなびくほの位

かきさゆくん末もくもり

公卿

おとろのち ちのち ちのち

民部々

民の宮

宰相

ちのちのち ちのち

○ちのちと 傍に抄き

中将

○三笠山 奥儀抄中小將とあつて馬内侍集

云々儀のをけちる人があつてみな人にて後中お

かきさゆくん末もくもり

けいさつて三まかちよあつて

三位

○川の位 重家集に刑部と位とあり

ちのち ちのち

ちのち

四位

ちのちの位 是れ位ハ四位の袍とあり

ちのち ちのち

正暦己未四位の袍と此と多く入添へた三位

此袍より上は四位の人も三位の袍を用やうとな
さう是は遠き事此始なるといふ或人云一位は
下四位以上は上揃と名付一極よまき色は袍は是
せらる是深き色の多ハ意よりちうだかなうへ
今ハ官の尊早袍の地紋とあつ事とならぬ
色は此より極よも四位以上は意せる袍を
さして是の神といふ事疑なるといふ

志ひしは 後拾遺云 一は意よりかきことあり
を於よまき人なりし事此はの世 是若
三位は位より三位より加階せしをいふ

六位
ふらう此神 衣服令深緑六位は保氏し女也

よ夕霧六位より殿上りの女をあらわすは上
よりうらなふといふ

大夫
まうちき

隼人
いぬ人 神代卷云是は火酢苺命苗彙諸隼人

等至今不離天皇官墻之傍代々吠狗而奉事者

也云隼人禁外門の警固なる外門は洞の約夫
あり大嘗會此日よはき儀より居て大吠此由を
まといふといふは大人といふ事よりへ延喜式より詳なり

左右近衛中将 ○此綱目 書云左右近衛中将此

綱目といふ帝王出師此時此階此左右より奉仕
奉と云 親く此階綱目をは引つてことむ

左右衛門

淨階に居るそのやけき

ハキあきのくるかき

能因みうたもて 左右衛門ハ禁裏の御門と守る

左右兵衛

眞義かきもアと云宮門ハ筑地よつけハ此名有る

かいは本 法部納言かいは本 言法部をい

そなたとつひんもさういへ 綺語抄よ

かいは本の素のあつさうもつていふのよふハ素

是新田部眞範自兵衛府生遷任近衛將之時

の形なりき

侍従

民

ホロさくむ

在推いちゆき いちくむ

いすのいさきうとていふをすけしをいふ

えあふ人定あふ

たひーかき 仙源叔玄氏なり 於乎紙二六た

こーかきと有せ之うまきと初めお店ハた

かきうまきおのふせとハ君うとといふ

いつ 紫明抄よかきハ後一守之き又云

系ハ釋多き

能因たほんたう 是日本紀の訓なり 万葉

さうまれまいけるさう有あつちれさ

時よあつちくさ

さうさくさ ち系丹花さう云帝王

白性

わが民をきくことせよ

そのことくことせよ 万世

そのことくことせよ

おめのまき人 山家集よ

まきまき事もあるいふ

お免のまき人 兼氏抄よ

番通 ○ひと人 むづい 飛騨国より毎年番通はるま

くなく 民部式よ云凡飛騨國毎年貢五丁

百人き 万士 何よかき物ハ思ふことぬ人の

お専繩のたひひとまらふ

男

ま横 石之 いたひく 世は いたひく 後世も

いもわ 世に をへり 綺語抄曰

よへり 歌賦說此詞ハさもあるハあきといふ心

たうといふ をへりも同き 契沖之よ

たうといふ 考和へ

女 在撰 けり 毎名枚綺語抄真美枚皆同くは

とほむ 詞之き契沖云愛字之今枚物を

まらより 考きハ物もまらハひと何なく

景行紀哥云 波辞 祿辞 釋云 端清也 廣養詞

也とあり 考きより 景行紀哥ハは

あき人のことつたて日向國よて系族を思ふ

てよと 考きより 考きより 女の事ハあきをた

夫

夫

卷の初と心得へく俊頼仲實清輔ふまのり
遠きうかふるころ得遠ひ有とゆめまらふく
くかううへ用よとハさ記くもいふなり

ハヤハ

わろくさ ハヤハ妻の下の出で一後美妻なる

云々 塩草云々わろくさハ常ハ妻哉いふなりと

いへう夫哉妻と云といへう又婦と云うとい

へうさうと云へうも云へう今按ゆらハハ記はこ

是ハ仁賢記六年秋九月○有女人居于難波

御津哭之曰弱草吾夫何怜矣自注言弱草謂

古者以弱草喻夫婦故以弱草為夫

と云ふ一又万葉云々春草春菜青草と書

あををめつ〜記ゆ〜妻も妹もつ〜け〜

毒權ハヤハ 多ゆ〜

毒權ハヤハ

前夫

○ま〜知 和名欽顔氏云前夫和名之

後夫

○うハを 同云後夫和名宇

妻

たまうつま 歌昭云玉うはま〜ハ妻哉とて

いふといへう清輔朝臣も妻のいふ〜ぬよう〜

不泌法云々 玉務間あ〜〜いふ〜たきたる

うあへる〜あ〜〜かくき〜

ハヤハ 法こ

前妻

○こた〜

神武紀歌曰佐夜離助語也佐

後妻

周コナミカ奈ナ泌ミ餓カ餓前 宇ウハナ破ナ奈ナ利リ餓カ餓後

上下畧已上

釈紀注和名欽同契冲沙云後妻於上鳴也
鳴喧之儀前妻子小浪也言無音と云大和物
語又けうハナリコナミヒト日一夜よろつた妻
いひかゝるゝと云々

野中清水 とらの妻成ふと云々

能因説之 古今 いまへの世中の清水云々

妾

○をむぢらぬ 文字集畧云非正嫡故以接為新也
名平無奈女云々

○めしうと 大和物語云さいゝ君の侍いもろと

とらうとめとて有る所は名のせうと云々

いゝ君ハ君ひくもむぢらぬ有るると云々 蜻蛉

日記云をのされめしうと云々 源氏小蝶云々又

えんえん

夫と捨らさるる事

○かびひ 童書抄云有 仲實哥 人らあるかひ

と云々ハいゝと云々をあしれけなく白根越きと

我 ○月水けぬ 月け

今俗云ぬらうと云々古語の跡まゐる 第八

あめうらうらうと云々春の野に花けり云々

いひかゝるゝと云々

ひるまはよるまをひぬるおあめはあめのかんぢりしきよ

兄弟

はくちなる枝 かみ川 なるこ

○なるる枝 言塵集

○いろね 兄弟り日本紀

○いろと 弟をり右又同女弟とも

嫡子

○たほい子 大和物語 大膳のうと公平お娘ら
たれわどのお所又信々おかいこはささいの定よか將

のごとひてきあひるうま 注云大子いちお姉は

沖子

○なうち 継躰紀云坂田大跨王女曰廣媛 生三
女長曰神前皇女 沖曰 茨田皇女云 万十四かん

有申子あり

孫

○むまこ 養系系北 おむらうよんとひてむまこ

○よりう 契沖云 なとて遊てむまこ

従父兄 弟

さくはめ 匡房 殺云 海樞集

今来といひけう 今来といひけう 待ふけり

ととほろ 八老若の女 ころてり

親族

ひう おゆ ○くえんそく 眷族之變化をへんそくと
よろここと一係氏

○ひとぞう 一族 ○まわやく 親戚を
まわやく

○けやく 外戚を
けやく

老人

はふさめ ハチ 八雲所抄云 おゆる けり

○をぢ 神代卷老翁ヲヂと云々 義美云々

ちうそぢ日よ

老女

童

○たうめ 專其字を用源順太守者專之古語之今呼老女為太守女

うないこ ハ字 あけよれ

和名鈿髮字奈 謂童子無髮 総角安本 万岐 皓

髪也マキ 万葉童子童女もうたふことあり

千種よりかゝる二十二三といふあまのつたハム

とたうたをり

○あざし 於此後童女アザシ 此國のたうこの

後より見ひらふ海土のわさしれをたうたせ

僧

能因 かうた

かうたう 能因 の形たうかうたといふハ

のう文字あつらふまゝ馬河の僧徒か

たうへる能因 ろまろへる のまのみ

夫木 世のわらわらむ佛をいれり

能因 たてしな

秘流 かたわら

山伏

父善よからむのまねようからまはまるは

そまかんで 秘流かよそまかんで

長能集よ ちうそぢれまぬ山迄を

ちうそぢれまぬ山迄を

拙人

山カシ 古事記頼哥曰岐券賀由岐氣那賀久

那里奴夜磨多豆能下界自注云山多豆者是今
造木者也

鳳四年數万人綠林山中かくまて盜竊とる

せしより盜賊ぬ名となさるといふ長明

白波賊よおこる事人のしれま

是ハ横道ぬもまきし思れよある影之著聞集ぬ

くうたらくは盗人の事之此説大ニ非る

允恭紀云四年秋九月〇諸氏姓人等沐浴齋

戒各為盟神探湯則於味ト播ト丘ト之ト辞ト禍ト戸ト岬ト等

探湯ツル而引諸人今赴カ日得實則全偽者必害

然ハ姓氏をし探みる。盜賊レ事トハ

あらとさきハくかざらとハ探湯ノ事トあらるハ

あららたといふよとひたとて陸ととらへる

盗人の事たといへるあらはさたとて昂

あらひらるとハ日本紀竟宴哥式アハ是忠

得雄朝妻推子天皇統あららしれとのくとら

海人

赤根石見
たづねしな なまこしきふ 八重良本 俊頼三

和名欽本朝式曰伊

は歌を引まういふまこころのまじり同竟宴歌よ
得武内宿禰 国くしんてくこちせしよまよた
ハま代のとあまははるまふりう とうめう是もく
うこちハ探湯仕事之盗人の事こい得へうい
○山のやぬ 是ゆきのたふひなふ兼盛まふ云旅人
いくあひまよぬそ人あひまう 旅人ハまうもまこ
○ちぢた旅をゆくいすしぬらのやあむら

漁翁

○むらここ

和名欽曰漁翁 越後 良 うは不吹上ま

むらここめてあまひせなま 夫木集

田とわそのむらここまあはちまよま 網代本よこ
まうらま

相撲

○ちううあませ

山家集よ 長月ちちうあませ

よかちまらうあまこまう ははくたのま 是ハ良
名まあまねとままひこいへたま七文字よい
まうらま

獵師

秘蔵

秘蔵抄よ家持 秘蔵こ人をまうらま

一城まらまといまはみ中まらまら

國人ウキカヒ

眞マコト様サマ ゆとりめ 催馬樂ウヱマシよ

としりめトシ 形カタ昭アキラ云クモリ 云クモリとハ老若女チホ

云クモリとハ老若女チホ 云クモリとハ老若女チホ 云クモリとハ老若女チホ

屠ウヅ思シ

○魚イサと云クモリ 源ヒ昭アキラ云クモリ 殺生及屠牛馬肉取賣者也

和名惠 止利 今云魚とハ魚と云クモリ此池猪云クモリ

乳母ウツメ

○ちおゝ 辨色立成云姪母ウツメ 今按掃乳母也ウツメ

○ちぬチヌ 云クモリは云クモリたチヌ云クモリは云クモリたチヌ云クモリは云クモリたチヌ

ぬチヌ云クモリは云クモリたチヌ云クモリは云クモリたチヌ云クモリは云クモリたチヌ

○ちも 万十二マンジニ 云クモリは云クモリたチヌ云クモリは云クモリたチヌ

云クモリは云クモリたチヌ云クモリは云クモリたチヌ云クモリは云クモリたチヌ

○ちチ 云クモリは云クモリたチヌ云クモリは云クモリたチヌ云クモリは云クモリたチヌ

云クモリは云クモリたチヌ云クモリは云クモリたチヌ云クモリは云クモリたチヌ

○つふね 和名鉄ツツ云クモリ 奴ツツ 和名ツツ

○まうとち 古事紀云 豊玉トヨタマ思シ賣ウツメ之シ從ツ婢ヒ

○おほよそオホヨソ 源ヒ昭アキラ云クモリ おほよそオホヨソ 云クモリは云クモリたチヌ

云クモリは云クモリたチヌ云クモリは云クモリたチヌ云クモリは云クモリたチヌ

○今按此身夫木葉イマニハコト云クモリは云クモリたチヌ云クモリは云クモリたチヌ

云クモリは云クモリたチヌ云クモリは云クモリたチヌ云クモリは云クモリたチヌ

云クモリは云クモリたチヌ云クモリは云クモリたチヌ云クモリは云クモリたチヌ

云クモリは云クモリたチヌ云クモリは云クモリたチヌ云クモリは云クモリたチヌ

遊女ウツメ

○うきめ 漢語抄云 遊行女兒ウツメ 和名ウツメ 又云クモリ 和名ウツメ 云クモリは云クモリたチヌ

○ありひ 謂之遊女待夜而發其淫奔者謂之

○やほち 夜發俗云夜保知 六百番哥合

信吉物語は川尻をさねはあそびともあつてこゝろ

○うき妻 徳子我妻「夜あふはあそび人のうき妻い

ふひろもあそびあつて

○たなきめ 六百番歌合「波のうきうきうきうきあ

おんよとあそびあつて

○あふれこ 同共合「誰とあつてあつてあつてあ

思へとあつてあつてあつて

此歌左方難云あそびあつてあつてあつてあつてあ

ひととあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

ほととのあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

流入

○新嶋守ネーハニ 新嶋守流人のあつてあつてあつてあ

羽院御製「あつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

此御製より新嶋守といへる流人の事ふあつてあつてあ

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

源氏物語

さあねえきま 夫木集 ありまきみはし守おる
麻のちちちやちやまき
よまろし云ふひまきまきし麻のちち
此身は幸可くくよまねれたる流人はきよらきまき流
人の事とまろしを深きまき後の事とせ

○たつき本 拾遺集より たつき本とせあつてたつた
と云ふのが事とあつてたつき流罪人も特免ハこ
年とて百かへさねといふ 源氏行平はたつきを瀬
ハ三年前古今より たつき本となつて波と云くはせ

コレ
と書

○かきの 和名抄云 加多井按 路傍居而乞

物故 傍居はきよ 今俗に癩人哉かきと云ハ非
たつき 伴世抄云よかきのお翁といへるも早下は詞也

△古人異名

ナリ
業平

松中
たまめき男 にはま男

は從具被出 志しを

○梶孫君 五節君

○五帝中將 親房卿古今序注云むろく業平をさき

かき一対五篇よ出仕けし小梶孫君と云くは或か

かき殿上人とも云つてひそて梶孫君といひたる梶の字

篇河原署して五篇の君と通しといひたるはかき後又

かへり歌よ帝は字はかむる城はあて帝とよひたる

より又而中將といふとき一説阿保親王の五男をいひて

緒嗣大臣ヲツク○山本大臣 江談抄云緒嗣大臣家在法住寺北邊瓦坂

東仍号山本大臣也トマス

惟成弁コシナリ○魚田弁タナキノ 称惟成弁云魚田弁初令列禁裏之田并西京

朱雀門京中等野之故也

源道濟ミチナリ○船路君フナチ 此人不腹之之時甚以優也而性惡人也仍不

可向之船路者天と氣和順之日甚以優也風波惡之眩

人不可堪之故称船路君

藤隆光タカミツ○大法會師子 号大法會師子者其幹極有威儀

應心精故林也 是江談抄

濟時大將ナリト○空辨大將 又云紅梅大將 古史云濟時

大將女子女御后夕テント申サレケルヲ款許

アルソト存無左右下度上被拜舞卒然而無立

后一仍空辨大將世人云ケリ而不知案内之人

紅梅知也云々

冷泉院女二宮

○火の宮 采花冷泉山堂云 东言此清いもうと

此女三此宮よめりせいこころくくうてそと

げうらひひけきわろせめひてほとましく肉あとか

けみくハ火此宮と世人やとひたうし云々

藤原頼忠公ヨリタカ女尊子

○素腰スウヱウ后 棠花物語卷山坐云 一能侍子おもむき

る女御哉おきなつゝかく清子もおもせぬ女御
能后よめ能ひぬる事やきつゝぬ事よそ人なや

しりてきつゝ能后とそ申奉りける云

信義シンギ

○双調サウチャウ君 信義ハ博雅三位の子なり式ア々言

管絃者伶人ホ哉寧して河陽ニ棲いぬひる

よ明月能夜曉よ能きとて江務不之能うちよ双

調能調子城吹て過る舟ありそ舟やうしき

近はく城守よまことと神よ唱りしう家朝よ比

能おき笛之能人きうんとくあやうおき

ひあへるよ能ハ能きとて

ひの考斗少へとまてよ舟りちる時能王能き

と能ひひきを信義と名能うしうと感

能みよへと双調能能なるうしうと宣せらうそれ

より天下皆双調能能と号しし

弘法大師

○五字和尙 弘法大師ハ筆城はよくと人左右の手

よ持左右の足よはきとて高草の字能書ねと

アヤとて五字和尙と号しと云代之上著聞集

永縁僧正エイエン

○初音ツツネ僧正 明くひよめ居るけきと郭といつる初

考ねん地つとまき 此能よあつて初音能僧正と

夏名よきしきしき

圓嘉阿闍梨

○はるかにけり雲 けつとならんこゝろかたき

といふ句よ 山からけりまねまきうさの枝とつち

らきしよりその人けりまねのけり雲といふとき

此人俊成々司時の人なり已上 曉筆記

高松宰相公定

○無月宰相 白河院於香相殿九月十二夜 歌池

上月此時高松宰相公定無月寺城詠き 学乃人

称無月宰相と

兵衛佐顯仲

○かみまのけり名法依 歌仲能臣名法依なり

对白河院御會よ 柳原池水といふ歌よき

かみまのけり池もいさうよみゆるうま岩の柳けり色よ

まのせそ けりよとけりせきうとてそけり人

かみまのけり法依と号を件けり池水なりとよ

めて範永等池もい井のけりよなりとよと

けりるあ之已備草紙

徳大寺左大臣實定

○名なりの大將 無明けり酒成名もなりき酒とよ

まのいしう八名きの大ねといふれあふとよ

俊成卿 ○なるき新入道 俊成をけり道新を考よてい

まゝなるく富士にたるは成たることよみてなる
さけ入道名ありけ大將とほりて人よ弟きあり
しとまゝ上無名抄

行成卿ヨシナリ○ままたのちうゆま り成々の他名拙著よりゆ
式ア○日本紀局 紫日記云きあるは肉体といふ人あ

やしうきさうよよきさうよ思ひ及るるをま
りたるはさううたきううことのおちうまへ結
しうたうへ源氏に物語成人よよませぬひつこき
こーゆーなるふけ人ハ日本紀をこそよき後ハ
おちたるよよき有りとけいもをせらるる成えと

よいひとて日本紀の局とをほけううなること
をうしくそゆるとま

法橋實賢ゴツケン

○ひきうへる 今物語よ云實賢ハ小侍従う子なる
いうまうりなる事うそけ人ひきうへると名付たる
は終よ法眼を弟やと

法の橋下よ年ぬひきさるる今ひとらうるに能らう
そやと申たるはきハやうてたうをよよらうま

重盛シケキ

○燈籠のおと 平家物語よ東山の麓よ四十八百の
燈舎新建一間より四十八の燈を就をかけたる
ころはきハしおと成燈籠のおとと申なる

輕仲

○こくそつ 同書大宰權師季仲七余りよきお

孝善

○まはつ 備孝紙云右海つ尉孝善ハ号まはつ

小侍促命婦

○演萩の侍従

神中抄云後拾遺此位者小侍従

命婦ハ演萩の侍従と云ルヲ補叙ヲ猶子ハ

なつと云々位者此類云加賀守正定女入道二

女將

正定女房云今業云後拾遺十

かき一のりまきる辺山まへつるまきれす

いひのたさ木しりめまう代は

いひのたさ木しりめまう代は

女將俊明

大目女將 十訓抄云俊明ハ人々何事もな

うまうりまきと大目女將とそいふまき

強信を同時の人なり

津守國基

為善神

後拾遺集云

くまきりまきり

くまきりまきりかきりまきり

此秀歌

くまきりまきりかきりまきり

袋孝紙云於或介之テ人々飛渡云右衛門

尉孝善詠云

ウクヒスノハツ子ヤナニ色ナ

ラ... 神之國基有^レ此座已秀歌被讀之
由存不安其後不食成無他事業和哥叔ウス
スニニカク夕マツサトミユルカナト云歌
ハ読ナリ人々寝譽ス仍散遺恨云畧

神主祐茂 スケシケ

淡々香能神之 春日言宮の社之祐茂といふ
人慢よりきり人よて集集の有るは比
和歌の遺之能法けさるる淡々香人よりきり
き成のさそなる とうとうて撰入らるるさハ淡
ふ香能神よりそ人いひけりさ
右古人の異名とてさるるさるるさるるさるる

神主祐茂

信正成援本能信正又ハ切柄 能信正も極他
能信正ともいひ信正本自行長と五徳冠者と
異名せハ徒能事よる信正の小徒徒物ハ
能信正ハ本家物語さるるさるる加賀ハ
十訓抄と載らるるさるる
又和歌の甲天玉とて 澤田能信正 権世の
慶運 濤江能信正 子能信正兼好 と異名
せらるる

加賀の沢田能信正とて信正の末とて信正の末とて
信正の末とて信正の末とて信正の末とて
信正の末とて信正の末とて信正の末とて
信正の末とて信正の末とて信正の末とて

佛の... 徳は... 徳は... 徳は...

佛

○ 佛は... 教主阿彌陀佛

...

...

心

心

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

初^〆也 氣の初めはけいんおくしつゝんじい
のきんせいの

同^〆雙葉 「ふたはのあらゝんりおのこをみす

の持したるらん 氣葉葉上 おのこをみす

~~~~~

~~~~~

~~~~~

孫<sup>〆</sup>雙葉 「たつておの持したるらん 孫雙葉の折のすけ

葉を枝よき

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~  
石見髓脳同

息思

~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

命

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

髪

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

三ノ三十一

判そののこころを思ふたまふふ今ハかきう

うもむのそら 又者丹美意十篇よ

も子ううもむのそらうらなひさくもよめ

小腹 ○こむろこ 和名抄 小腹古名 俗云ほろこ

かうそハ陰上の畧

指 ○むよび 同書此訓俗云大指と混さへるを大

指ハオホオヨヒとひらきあへ

馳 ○たむき 同前

○たふき 後撰集よ 折つぎをたふきよけ

とよめ

脚 ○よむろ 和名抄云脚曲脚中也

うつほ物語よ髪ハよろほもかうこくとしん

踏 ○あまひく 同書此訓

○あまこく 同前

月水 さりり 同前 同雅集よ和泉式ア能世へおらて

らるよせうわうよて奉幣かまをさうらるよ

晴やらぬ身能う記のたぢひとて月能ハ

アとなまらうかき

涙 秘中 身をくぬ雨 風雅集よ 泣くしとおもハハ

ちうねあぬ身能う能るよちやうこよせよ

空まぬ雨 後撰集よ 空まぬあふあ

お涙のこころの山やよそよそら

瘧

思ひ川
時節

わさきるま

なげきおもう は夜露塔を憶まうなげきお

ちなげくしつとまうませ又あいらいんく

吹せハ日さもふうなげおのころあそま一物

城 是等よまうへいあまその風おと合を

一

わさき 齋宮忌詞云病 夜須羨

○まもくら 晴吟日記よ云 屋おへおまい

瘧

○とありわくまへへのをころあうま

くらまうなまんとてさハくもいとあそれたう

和名録云瘧疾弁色立成云之純半足中寒作

瘧也今業よヒミハ俗云ヒマ 志もくらハ

俗云瘧腫 或云瘧也け袂衣よを雪也けと

もい

○かくひやう うは不暖味院まよきいづつひ作

○かくひやうといふまのおうしんく源氏業よま

まうひ作みうかくひやうといふそのふせん

ひ作てましくくまうの華も作まうは納を

云はまもむひおけあ一おけといふ 和名

腋^{アキ}下^ノ毛^モ

欽脚氣一云脚病俗云阿之乃介

○あき毛 万葉十卷 阿之乃介はらまをたつらそハ穂^ホとて代穂穂のあきが腋^{アキ}多^タかき

○あともく。又云まろくこ。和名欽訓

疔^{ウチ}

○あひぬ 和名訓

飼^カ面^{オモ}

○かきも 同云面皮上^{カス}有^ア澤^サ是也

黧^{ホク}子^シ

○ちくくそ 同前

瘡^{ウケ}

○あらしやこ えやこ 源氏花葉巻よりしるし

やまよらうらひひでよろしよまきさひから

まんときせうせぬと云く和名欽瘡^{俗云衣夜巻}

疹^{ハカ}

○あらしうせ 源氏花葉巻よりしるし

ハあらしうせといふものいふは上中下や

あらしうせ

是今所謂はらうらう此病長穂ははらうと略々

疫行せしや委考する 別記に有

疱^ウ瘡^カ

○もろせき 續日本紀云天平七年閏十一月壬寅

是歳不稔自夏至冬天下患豌豆瘡^{俗曰天}

死者多^ク是瘡瘡^カ始^ハる^ヘ

瘡^ウ痕^カ

○ちまうこ 大鏡第五云は水のうこハ字千と

さなる人れをくろくてひこいよをまうこ

うちほをてかちちがけたるよをまうこ

○つごき 源氏花葉巻よりしるし

吐^ハ乳^ニ

異名分類鈔卷之三目錄

禁中

客舎

竹柱

△居所

殿

隣

墓

堂
築地

家
檜垣

田家
塙

軒

硯

△器財 衣食

弓

筆

靴

水滴

籠

墨

扇

書籍

枕草子
榮花物語

宇治大納言物語
古今集卷次

続世継
竹取物語
類字名和歌

新撰萬葉
後拾遺集

新撰撰集
新撰撰集

磬
鈴
念珠

念珠

衣桁
琵琶

毛氈
倭琴

櫛
箏

鼠ネズミ 獺カウ 馬ウマ

蜻蛉セウジ 蜂ハチ 鬍ヒゲ 蟻アリ 蟒ウツ 蛇ヘビ 馬ウマ 陸リク

魁カウ 海驢アヒ

△虫

蟋蟀セウジ 蝶テフ 白魚シロイサナ 蟬セミン 蝮ハチ

猿サル 麀ウシ

蠶サナバト 養蠶サナバト 叩頭ウツムシ 蜈蚣ムシ 蝙蝠カウモリ

獺カウ 鼯鼠ハクビ

蛇ヘビ 蛙カウ 蟻アリ 蝮ハチ 蝮ハチ 蜚蠊ヒラキ

狐キツネ 犬イヌ

蛇ヘビ 蛭ヒル 堂ドウ 螂ロウ 斑猫ヒメネコ 冬蟪フユヒル

異名分類鈔

△居所

禁中

○むらさねはむらさね 末木山の家はむらさねはむらさね

田舎

わあくさ 朝廷をりてく

殿 ○みあらしの 神代紀穿殿ミアラカイヤク 豊トヨ

堂 こやた 秘花抄云朝忠より一人をいふらんかやた

家 いちほろ

○やう 後氏系をきくやうはむらさねのむらさねとていふやう

家の字は別家持なるよし知へ

○くだ え真業よりゆきまはたは休は風の吹らるるごとく

まきばともせらるるくだい家し伊勢地流よさつよさめなうさ

かやちとよえらるる家雞のまひよて家雞なごといやといや

○志まや 一カ葉葉十三小座のまひまよかま持人とよあつま

やハ醜屋といやしも家をさし

田家

○たふせ 万十からるるはたふせのもつたふせのまよや

ちまうたらるるせらるるゆ 田廬とさし

客舎

むろすこ 類聚國史卷百七十二難波百濟客館云

隣

となめさ 引ま本の形李下あり

築地

えんまゆか 何まろ一年経て富家未て見ゆええ

ん志ま垣もかろはまし

檜垣

さたけあま 引ま李下よりあり

塙

みたまといや 家のまのまはるるまはるる

○あらてんむ 色葉和糖よまひや一ま家持めりよかま

ましてまろまろまろまろまろまろまろまろまろまろまろ

まろまろまろまろまろまろまろまろまろまろまろ

ふむ妙なる百餘文の旨のむは是垣をあらしてふむとよきなり

竹柱

花玉

かくも志ら 竹はこゝろをめてゆくるのなる城かくもくら
とひらたふまカトタケトケ通して死秘花抄より竹を
かくはーらといやといへり下りてえぬ

墓

○おキくキつキき

天智紀丘墓オクツキとあり万葉集第九イの
のけたきまのまゝのひーうなををらめ秘墓オキツキそのまは但
一第十八は於久都奇オクツキとちりねむオクツキとよむ一

○うなわあつ

係氏幻よりなね松はねはるはとまゝ花香
録情云白氏六帖馬鬣墓形とまゝ文選馬鬣松とまゝ
なわまつとよきなり百餘文をたててくまををらめ六は

うなわあつしむほよきはねをうなわあつといふとまゝ
は海抄よき

○△器財衣食

車

秘蔵

あ志るにあり花盛ありたき秘蔵抄よりありてまゝとハ車を
まゝとてまゝうわとれと秘蔵抄よりありてまゝとハ車を
いふをくまのハ鞭をいふまゝとハいそくくま

○里舟

ウ○たらよ雄畧紀云天皇用弓刺止之内蔵式御弓

万葉御執乃梓弓とあり

鞭

ちや志七 前秘記よりあり

籠○かたよ 神代卷下為汝計之乃作無目籠云

○くら、つ 万三「志」海に流るるものあり人々つめて玉とか

まむむいひゆきて足等

○めさ志 奥に我が志めさしハ海に流るるものあり人々つめて玉とか

まむむ密助よて 志に流るるものあり

○いさみ 神中抄よいしハ番とあり 釜箒籠告南の歌よい

「いさみ」はさみよていさみゆきて流るるものあり

○たまらつ乃 契沖海流るるものありハ流るるものあり

んとつとつとつと

美傳 だまらつと

扇 てなれとつと 扇に流るるものありハ流るるものあり

かざちぐさ 扇に流るるものありハ流るるものあり

かぼうぐさ 扇に流るるものありハ流るるものあり

硯 硯の油

○みりい志 海海抄云 硯の文殊の眼なりけり眼石と云

けり眼石と云て見石と云て云て云て云て云て云て云て云

おもわくさうたみし乃やうしハ流るるものあり

○まみさを 和名鈔云 硯 頂美 頂利

筆 みづくさ 筆に流るるものありハ流るるものあり

なまらつとつとつと

○ふらて 和名鈔云 古文作筆 布美 今後ふてとつと

水滴

○もみすまかめ 同書云水滴器 和名須美 數利加米

墨 一色 松能けふ里

已下書名

枕草紙

一色 清少納言

栄花物語

世継物語

宇治大納言物語

小世継

續世継

はくし髪物語

増補のたよりなり
又今鏡ともいふ
はくし髪

竹取物語

かくや姫物語

類字名所和歌

大名言

新撰万葉

昔歌万葉

悦目抄

更汲記

是本抄のくみ程ありきと云ふくはくし髪よりとある

古今集卷次異名

第一 ふろくし能事

第二 七つ花能事

第三 夏かきとの事

第四 初秋風の事

第五 山風の事

第六 初志まれの事

第七 さしる能事

第八 うき雲能事

第九 まろくし能事

第十 うき雲の事

第十一 あやめの事

第十一 あやめの事

第十三 ねむい能事

第十三 花うつし能事

第十五 徳舟能の事

第十五 わさる川の事

第十七 うきうひの巻

第十六 おき川の巻

第十九 ゆうのはね巻

第三 初巻

右巻字記より見しう。竟憲你秘抄よし載らばお信
秘事終りしなり。但深秘抄より第三の花なごは巻第七
きうまきの巻第十三終りし秘事十八九なり。言終り
又深秘抄よりおよ今一通りの巻に終りし名もこれと
もこの巻と今はいしと

勅撰異名

後拾遺集

小鱈集

津守國基小鱈をバてりて撰

老幼ゆよかたをいへり多くとりて終りし名なり

金葉集

臂突主

と云。志世集といふころりやと。向也世集

いふなるんそきり事とあまきあといふたうりし松子
ふよあせきもの一りうりきりし
言はあのとあうり七力終りし名といふ終り常はさうり
なごこの巻の抄をえりしを志世ものいふはといふはあ

新勅撰集

宇治川系といふ武士のあまくとりてあし

續拾遺集

新勅撰集といふか、定のあまくとりてあし

新後撰集

は守系といふ信長の外友まくとりてあし

右升壇抄より

鈴

お七ひの玉

念珠

お七ひの玉

衣桁

お七ひの玉

和名抄云。衣架字と作施和名美空抄

けよのわらわらみよをかはよぬひかきし
○いり 敷本糸よ「さかしのいつたか」なるるもろくしを
ぬしとて人のかきむ。弘明云いふとてみどりけとてまも
のかとてものし。

毛氈

○かち 和名鈔云氈毛席。撫笔為席也。和名加毛は
と修毛氈。其音を用るものなる。

擲

杖因
こよまろ

磬 ○うつけこ 磬ハ打たしとよ。擲はあまゆれしとらせ
とといふと名あてにまよふとら。玳瑁糸よ。後にはけ
こきまよの取なるとし。けとこのけりらとを。徳守の人オ

劔

三ノハ
あはれまも 本朝文粹雄劔在腰。抜則秋霜三尺
けりらういつたまろ

琵琶

○よつたを 兼盛糸よ「よつたをよむをふ公をまろへつひきあ
まけとまろくもなり」琵琶をよつた徳とよめは是れなり。

○ならばたつこ 玉糸糸「同つた結まろへよはをて思ひて
すの月よ糸もわきれし。淡紅中納言お侍かきとてとら
あまよはの糸もまろくもなり。ハ中なる月とあまも。琵琶は
よららし。和名鈔琵琶満月半月者。在腹之孔名也。

倭琴

内時駭は園大井川よまらふなる本流と下るをえて彼園の
人吾子^{コゴ}就^ツげ本をらて始^ハる船を造るとまゝ仁徳帝より已
前船ある事勿論しとて一^ハ時流布^ハ船のまゝ成^ル五子就
造出せるれとてさしはあをこんく船を造るめりてさ
あといかうやあらん和名鈔云^キ。植^キ。和名ウ^キ。水中浮木也。
秘^カ花^カ。花^カ。うさつこつむ。わりの海船とてあまあらん船とてう
むらうはうふりさあは波流とて

帆掛船

いさかけふね 引ら海の波船とていふたういさか
希母^{ヒモ}う漕^ウと

舵

○たい志 和名鈔云^キ。巨船木也。字亦作舵。舵尾也。

和名多^カま。こまやうく今謂^ハ握^ハなり。後世タイレ船古名をと

一^ハがうらまふ一^ハ同書^ニ。櫂^ハ和名カチ。使^ハ身^ヲ捷^ク疾^ク也。は
是今謂^ハ櫓^{ナリ}なり。若^シ手^ヲまよ^ハ一^ハ握^ルとてめるとよあまは櫓の
事^トといふ。志^ハれとて櫓といふものハ、い^ハく一^ハ握^ルといふと

燈

云^フつ花^ハ 言^ハ燈^ト同^シ

燈

九^ハつの枝 朗詠^ニ 餞^ノ別^ノ 九^ハ枝燈^ハ盡^ス唯^ニ期^ニ曉^ス。江次第

ハ云^フ。立^テ黒^ク漆^シ燈^ト臺^ト九^ハ本^ト枝^ト件^ト。机^ト四^ハ方^ト四^ハ角^ト。中^ハ央^ト加^フ

打^ツ敷^ヲ謂^フ之^ヲ九^ハ枝^ト燈^ト也。

枝^ノ音^ハ 之^ハ燈^ト葉^ト也。

釜^ノ○や志^ハ也 之^ハ葉^ト和^シ類^ト云^フ。かまをや一^ハはといふと云^フ。大^ハ常^ト云^フ

苞豨

○あしまたし 和名鈿裏魚肉也之字始於漢字網のあ

とてて成か何なり

尺

○たうはが里 同書尺竹量也不加波可利

搜

○おほつら 同書鞆器謂清器虎子屬也今秦俗語

都之字彙虎子搜器也西京雜記云李廣射獵軍

山之北見伏虎射之以其頭為搜器云字始於

二物中破におほつらとせしむとてて成か何なり

如也虎子を始とせしむとて

新

たふちつこ 抄註云新とて成か何なり

柴

○ふち 古事記拾遺柴垣打成而之訓柴云とて

烟

ほけゆる 徒因及本同一

斧

○たつら 月信集とて成か何なり

物干

乃名此物之成か何なり

棒

○たうち 有明紀云故以梧戦之梧与棒同也

とてて成か何なり

とてて成か何なり

とてて成か何なり

とてて成か何なり

とてて成か何なり

とてて成か何なり

とてて成か何なり

鉤ツリ ○ち 神代紀云。作新鉤ツリの反チなり

足代ツリ

○あな、い 竹はあな、あなといふあやともあなといふと

げらともいふ。昔は足代のつし。和名鈔造作具云。檜

柱ツリ麻柱アサヒと並出せり。檜柱ハ今所謂ツ、ハリ

菓子

善撰 善撰 さいまいこ 小言るん亦同し。菓子實は異名なり

粽ササギ ととゆひぐさ、一と海老志の池に神ひらくまゆ中

酒 なふる、かすみ たけのえ

をまごりもほを流霞竹葉ササギなりといふ。まよよササギはと

れはさひ、アサヒとのまろしと謂酒清者ササギ為聖ササギハ濁者ササギ為

賢人ササギ

のみわ

仙意抄云。先達の稱よよササギはハこのうき、これハ味酒

のみわとつとササギなりといふ。ササギハ味酒とつとササギなり

とき、又云古伝國神酒ササギ川水ササギをそて、為大神釀酒ササギハ

をみわとつとササギなり。但しみわとつとハ神酒ササギハかま

名なりといふ。和名鈔云。日本紀私記云。神酒ササギ私語云

美和

美和

○かくなま

是内裏御名の中御は信光ふよむむる侶を
いかり。千種云内裏御名の中御信光のたつともて
やむむとて。招梨を合ふなる。く。此きよ。は。侶をのむなる。江
次第曰今夜蓋^{スル}拍梨^{左近衛南摂津在名也}
氣茶と云人橋津國招梨^{は彼地利河造甘槽也}庄といふ。此を左近衛府よ
書せられ。く。此此利をきて造る。侶のこと。又本歌
昭^となる。は。る。之。世の。仏。此。中。の。夜。よ。た。く。丸。な。り。を。も。め。お
まむむ

齋

○ふくま七の 和名鈔云野王案凡非穀而食謂之
肴和名佐加奈一云布久之毛乃万葉集よふくま
持ともえらた。和名よ鏡^{カサ}鏡^{カサ}といふ。も。の。こ。と。い。ふ。へ。ら

のやうならぬ。おまむ。菜など。搥。対。招をさく。切。ま。の。こ。回
川。あ。ち。な。ま。ら。う。ま。ら。い。

菜

○あませ 搥まよ。え。汁。お。と。う。て。皆。の。ま。て。が。も。も。や。は。は。い
ま。も。つ。は。は。ら。う。あ。ま。せ。残。る。ま。ら。い。ま。ら。と。ま。ら。ま。ら。あ
ま。せ。ハ。菜。こ。と。い。ふ。

鯉煎汁

○かつをいろり 源順云木朝式云堅魚煎汁^{加豆乎}
^{以呂利}

綴衣

○いろくころも 秘菰^{秘菰}おらよ。ま。え。一。端。の。ま。ら。は。は。本。と
お。ま。や。お。お。ま。ら。ま。ら。く。衣。袖。万。ら。ら。い。て
お。ま。め。こ。ろ。も 針。と。て。ま。ら。く。縫。た。れ。お。ま。ら。め。衣。と。い。ふ

絹切

いづの...
○さいで 物...
そめなとれ...
を又付くる... 其外は...

擧鼻禪

○たふさだ 万...
著擧鼻露所相撰

魚貝

魚

秘蔵

こづむ志

説文魚水蟲也

みさこな...
い 書系抄云

おしね...
い...
小 能たこ

伯以水為國以魚鼈為民之教本第...
おろ...

せむもの 日本紀 鱒廣鱒狭とあり

ちうはそらまゝくそをち力新よかきへつーやまはせむ

○あさち 又本集より引く事ありてそのた力れやと云ふ

いづれあさちのかき成さるる一はあは位お下たるかよ
よはうなるに、あの入はよ力れうはうて魚は遊ぶしかる
なく見せられよをると云ふうはか園ゆはう上、あうか
くさうさめらるるを山川のあさちとおさのうて見しん
も大将をうあゆまうしをえふふなまとおされし
しあさちあさちの小魚の想名なる一。和名お
鰈アサチといふもの列よ一おぬ

○おま 古事記魚の一字一ナと訓を為鳥遊取魚ヒルメノイサあり

いさこ 藤原まよぶことばをたれなると云ふ

是に万葉よりみしそあをせしよさなるうさうそは
なう成るよんはさうとつうあをりるれさういさこ
いさこの誤なり

鯨 ○いさま 元恭紀衣通郎姫歌曰異舎イサ儼ナ等利イサ云々

釋曰謂鯨取也古語異舎者鯨也儼者魚也云々
万葉より勇魚イサと云ふ

鯛 ○あかめ 神代紀下曰海神乃集大小之魚イサ遍問之

魚曰不知唯赤女赤女鯛云々

鱒 ○はらの 公事根源云後赤社執事とて魚を筑紫より

景初天皇の御宇筑紫の國宇土郡長濱より海人は
を釣る事よは聖武天皇天平十五年正月大宰府よ

こゝろに或るもの。後志とハ鱈とハ魚とハ字鏡和名抄
共ニ鱈魚カハ鱈アリ別カハ考

鱈

○むらぎ 万十、五やせ、うし、さ、い、ふ、もの、武奈岐と、うめ

せと、う、る、原順云、文字集略云、銃頭口在頸下者
也、契冲云、口在頸下、鰓當在胸、胸、髑乎、うな
さ、と、い、ふ、を、記、録、な、る、一

鰻

○なよ志 和名鈔日本紀未なり、と亦志土佐日記より

うし、か、ら、さ、く

○くちめ 神代紀下、口、女、自、口、計、釣、以、奉、焉、口、女、即

鰻也、

鰻

○つな志 この志ろといふも古名なり、孝徳紀、塩屋、鰻と

人、能、名、あり、万葉十七、は、か、う、と、い、ふ、り、字、鏡、又、銘
終、鰻、等、能、字、共、よ、コ、ノ、シ、ロ、と、訓、を、下、野、や、言、能、ハ、語、
す、ら、燈、た、つ、の、う、ろ、よ、け、な、う、やく、ら、ん、原、氏、松、風、書、云、
あ、ら、ち、よ、け、な、う、ろ、よ、け、な、う、ろ、よ、け、な、う、ろ、よ、け、な、う、
ろ、よ、け、な、う、ろ、よ、け、な、う、ろ、よ、け、な、う、ろ、よ、け、な、う、
ろ、よ、け、な、う、ろ、よ、け、な、う、ろ、よ、け、な、う、ろ、よ、け、な、う、
ろ、よ、け、な、う、ろ、よ、け、な、う、ろ、よ、け、な、う、ろ、よ、け、な、う、

鮓魚

○こつを 漢語抄云、古都乎、本朝式用、乞魚、二字、東

雅云、品字箋、鮓、一名魚游、と、つ、の、函、書、云、魚游、以、鮓
と、い、ふ、舜、水、朱、子、其、相、を、る、く、鮓、なり、と、い、ひ、一、ハ、古
の、鮓、魚、今、れ、ナ、カ、ツ、ラ、な、る、り、鮓、ふ、つ、一、ハ、後、俗、乞、能

音骨よりちりこぎさるるなり。カツラハコツラは特ナとて味は美なるをいふよし

韶陽魚

○こめ 和名鈔云。韶陽魚和名古米味甘貌似蟹無甲。口在腹下者也。東特云。即今俗エヒといふもの也。エヒといふ尾の長々たる。燕尾といふ流をいひてとるなり

針魚

○こめを○よろづ 和名鈔云和名波利乎一云与呂豆口長四寸如針故以名也。東雅よ即今サヨリといふもの也なり。神武天皇御より。鯨サヨリといふ事を釋云。鯨多集といふ。さるハサヨリハ多依なり。ヨロヅといひてもいふ成なり

鮪

○志比 日本紀真鳥大臣男鮪といふ人あり。万六鮪釣と海士船ととるなり

黄鰓魚

○か志の 寺島氏本草綱目を引く。黄鰓魚は子孫用ふ和名鈔鯛カラカゴあり。カラとコリ通者下略して俗よひ来まるとも。おそふは鮪カシカシエシエチトシ鮪鮪杜父魚等。同類よりて土地乃流稱のちけりとも。京よりゴリといひ。近江よりイシブリ。大坂よりイシモチ。越前よりカクフツ。九およりトニボ。伊豆駿河上総下総陸奥等。國よりてカシカといふ吃いふ。必大日形類。小鮪而微小。腹下黄白。背上青

黒帯黄腮下有二横骨兩鬚極細羣游作聲如蟬
明之吟歌人詠之云々奉綱羣游作聲如蟬
いづり或云廉能幸く唱ふ似るなり河廉といふとい
ふ。宗長法師日記云。庭の山水ありき。なるはいふ
一かきつやう能あつゆきそ「せきいも」庭の山水ころ
くといふやうかしのあまきむむたう

細魚

○うるまごこ 和名鈔よるしう。と俗よアミザコといふたぐ
いなるし

海鼠

(こ) なまごといふを斐海鼠と對し一名よく正訓の海

鼠能二三子城コといふ。古事記云。天神御子仕奉耶
之時諸魚皆仕奉白之中海鼠不白

鰻

○いそかひ 契沖海云。あそひを一方城といふとよ
えう。是名なるし

真珠

○あこやたま あらやまの飯珠をいふたう。一方城集
第七「伊勢能海あすの志まのう飯玉とて乃らら
るは志まのむけあを六帖うらあす能志まのあらや
たまと志まの志まのあらやまの飯珠なる事ゆら
なり。山名集なる飯えねあらやまといふ貝能よと見
せしと古志をなすの六帖を能志まの志まのいふを和

名鈔にもあると訓を信貝と事なり。お産家能はる
ことある。和名老流六帖を證し。鮫珠なりといふ人よ
たさく奴言信抄述りもある。の玉大さ豆さうりなる。錢七十
貫りうとく所はる。たさ事うんさうり。とも鮫珠の價を
言なうとを思ふ。一。女大曰。本朝以鮫珠為上。蛤蜊
次之。未識以蚌珠為真也。或人云。六帖を證し
る事。其いもれあり。志さくとも鮫珠とてあやとついで
る。訓義め何いそくアとてあやハコヤハ是之古流よりあ
をら也といふ事多し。一。和世の人能くあやとついでた
らめり。訓義鮫是真珠なりといふ也。又アハ嗚呼と
歎き。辭もあやとついで。鮫の字は又同一かき

蛤

りむさ。景行紀五十三年秋八月。白蛤為贈進之
今俗蛤結うを去り。錢ムキ三といふ。うむさ
こといふ上略なる。

蚌

○ささ。是をささといふ。東雅云。蚌貝の刻がなど
乃ささく理あり。國俗凡物乃理あるをささといふ。
志保之理云。奥州地名象潟也。象ハ借り言なり。
蚌潟なるべしといふ。

寄居子

○かうさ。源順云。和名加美奈。俗借用蟹螯二字。
方丈記よかうさハちひさねいへをこのむ。よくあのみ
志保なるとも。かうさハかうさハの轉流し。

鼈

○かちめ 源順云鼈和名加波如米元真集云「かちめ老も六
一尺代に老るもこの水の底よくそらうわらふ井

鶯

△鳥

莫傳

ちなみ鳥

私伝或中「書きたるわはななりけり山室に新よ

まてな希とふたん鳥！

之月とこ鳥 是ハ用ハるハ藤垣ヲ誤ナリトハ後撰

口決ニ時鳥ハ異名トイフ。時鳥ノ下ニんらん！

ふほし鳥 藤原ニ「書きたる消そよなるらさやよ老ら

らしくよなく白ひとら

私伝

みめ鳥

公忠「みめ鳥とつてあかろ家宿にいきね板

のふふらん

ちへ小鳥 書のおやといふ。赤人垣わはしよとく小

きよとやゆさてうとひもさるくまねとや

○百子鳥 拾遺集下雜云建久六年正月叙位

そていつかひるあしたた鳥替際房とわはるる

はしよ老枝うつらうはしよとふしよとふしよと

「百子鳥とてはしよのよめはさるといふとらん」

是言家々言我々もちうとよとぬり」

○春の鳥 源氏物語上「春の鳥のこころいよとよとらん

ぬんよゆいよとて言ふ」

よるらんこをわはしくは

○こゝめ名 色望和發とある人の家ニ於梅れりて記
 うららるるを國王にこころをて勅使を寄しほしを
 授けしを梅こころを守とていふべしとされし勅を
 梅ハをしり次等の言はとてはくいつらふ人梅のありし
 かたをてをいふれし門あはれつわくとてめめいふ
 うららるるをこころをいふとていふべし

雉

^{秘花}すかねる ちちれよる子成りてそのひきまをかく

火の原となつたる

^{秘中}うららるる 「こころ」のしれはうららるるなくあはれし

まはらるるを今梅宗抵けを万葉よるていふ
 されとてを万葉よる事なり。又雉をうららるると云

事も不考疑く論語御黨篇山梁雌雉時哉と
 ははららるるに梁とて是名とていふべしとていふべし
 なるべしとていふべしとていふべしとていふべし
 来よとて今或人西持来山梁時何如之とていふ
 まはらるるの事とていふべし。明衡ハ大言寮持士とていふ
 の人なり。故をてやあはれ散本系連ちよるに名のは
 こころをいふて後頼勃とていふべし。ハ山のうららるる
 雲雲房乃とていふべし。月の月をわとててそそはれとていふ
 万葉よるに事なり。但しうららるるとのこころハいふべし。ハ山の
 うららるるといふべし

○のつとて 本草綱目釋名野鷄とあり。ツハ助なり

天つちの沖つ波のこころ。継體紀云たよるのこころかあはた
とれりのつらうきさしハとよむ。上下略とつたころ。古事記
よるこのつらうやまといふ

鸞

つたし つたしハ古訓なる。天智紀云。六年葛野郡献

白鸞スレツ私記津波比

郭公

くこら 一はたをたさうやわらる夜なまよひに於て

一く唱くさうらう遍昭ハ按。は擬口は云。苦ク歸樂ラと云

万葉よあしち山歌りこら結をさうもさう一はた

物樂をなく。とと。とはあ万葉やあ事なり一はた

ハた 時をさ みる番さうらうといひさ結入ああとのさう

志て結たをさ

志て結たをさ。 神中抄云。志て結たをさ。ハ志つめたをさ

といふなり。ほとと。まはハ勅書の名とて。過時不熟と唱や

いふ。畧。奥義抄。系抄。續。神抄。共。よ。志て結たをさ。ハ勅

二城りといふ

づまわこ 拾遺系。羽恒。同。い。さ。を。ら。う。わ。な。さ。う。る。た

子うらら。れ。か。の。さ。う。れ。の。以。書。系。抄。ハ。勅。云。ハ。同。子。結。心。を。結

て。あ。ら。け。ハ。書。ま。う。あ。ら。け。ま。か。ら。う。さ。ら。と。い。ふ。う。ま。ひ。を。結

さ。と。云。ハ。聖。昭。云。わ。ら。う。さ。う。ま。ら。や。い。か。事。ハ。う。ち。し。れ。こ。乃

このよけていひ出し。ま。い。

結 けをまは といぬひ 古語に教ハ出ぬひとてさうらうに於て
さうなれうといふ事ハ後撰に決る

新詞音

上た、音

五露音

早苗音

残音

七世音

鏡音

さくめ音

さく七音

夏音

百音

玉音

田音

草音

たそか音

玉さ音

うた音

めつら音

夕か音

卯音

あま音

あやめ音

あめ音

むち音

くつて音

あま音

ねと音

おうけ音

あま音

あやな音

あま音

細取よとてなは音

○人音

○志音

○た音

以上

○三月廿二日 定家之説に二とをさしては月日あり

○「内」も「外」といふ「な」も「はら」も「あそび」も「たふ」も「の」

○「ね」も「い」も「ふ」も「つ」も「と」も「る」も 上は後 撰に決

○らんるるる 是ハ和名抄ノ 鸚鵡オナギス今之郭公也とあり

○ま音をいふのまは撰に決らんるハかまのねのまはし

○るを本註すよきとて時毛のむくく〜たふがを

○「ねの〜」〜「ねの〜」の説は同

○「無」常々音 後撰に決らんゆはる無き説をむいへ

○「こ」ひま音 亦よ同〜昔は「く」を「こ」として 飛ぶ 橋を

○「い」〜「を」〜「は」音 万葉集第二の「い」〜「を」〜「は」音

○「つ」音 堀川公房の「つ」音は「つ」音なり

○「お」音 一カト「お」もむらなして此杜のまのねをまねよ

○「ま」音 神武紀之摩途等利宇介辟餓等茂は

○「い」音 神武紀之摩途等利宇介辟餓等茂は

○「お」音 神武紀之摩途等利宇介辟餓等茂は

○「二」音 神武紀之摩途等利宇介辟餓等茂は

雁

雁 二季音 莫付抄曰〜忠岑いつく成古〜とて二季

鶉

鶉トビ 小鶉トビ

○いさら 万石もあたうと云は侍いとうらまはねたもて
まゝ仙覺抄云いとうらまはねたもて
うさそとひつらと

鷹

鷹ハタ

ぐち 仁徳紀云四十三年秋九月○天皇召酒君

鶉

鶉ニセトビ

示鳥曰是何鳥矣酒君對言○百濟俗号此鳥曰
俱知鷹也

○まきとて妙もつとぬとものやうな
○まきとて妙もつとぬとものやうな
○まきとて妙もつとぬとものやうな
○まきとて妙もつとぬとものやうな

鶉

鶉トビ

○まきたる 日本紀又間人陶船など間話まてと

○このと 和名鈔鶉似鷹而小者也契沖云云小似の

○まきとて妙もつとぬとものやうな
○まきとて妙もつとぬとものやうな
○まきとて妙もつとぬとものやうな
○まきとて妙もつとぬとものやうな

雀鶉

雀鶉トビ

○つと 和名鈔云漢語鈔云須美多加 或云美豆云 一也

○つと 和名鈔云漢語鈔云須美多加 或云美豆云 一也
後百廿二片敷ふむとほとていへをさうんそつと
ぬつこのふる

○えつさい 雀賊ハ雀鷄の雄なりといふ

ぬきけりいれそをうさひにたてハ鷄の雄なり

○あさかぜ 西国も後百てよむとくもみからるるそのいお

山の音よなきぬきぬきめあさかぜはよあさかぜハ集の異名こ

まよまよ字鏡ハ晨風鳥 波也と見し け訓なまこし

○さーむ 集はちひされものなるいづか

そよ夕日影おしうこの風こふる野人の聲は

あし西国もあまのこいよまよまよもまよまよ

あまを長鈴よりまよまよしこまのいづか

さういもあうらさうせとまよまよまよ

鳴 ハカガ 一方まよまよまよの聲はゆきのまよまよ

集しむまかりは鴨のまよもまよまよまよ

まよまよまよまよ

○おきつる 色葉和歌云なまらをもはくまよまよ

かもとよ船一かもまよまよまよまよ

○いさごのまよまよがふ音 船恒集し亭子のまよまよ

大井の御幸せまを船へる時のあかもまよまよ

まよまよまよまよまよまよまよまよまよ

千鳥

いそな音 名うーおふゆま補のいそまよまよ

かよまよまよまよ

鷄

ゆふつけ音 ゆふつけまよまよまよまよまよ

対阿境の事としておはけの事をもめいしよ、法をよめいしよを付て
四方の園よぶうてぬかこしん。

庭つとら 万七庭つとるか事のなまを岸のきん岸のなまこしん

こころもなまを岸のなまこしん

かけ 万十二の事としてぬかを岸のきん岸のなまこしん

ぬかを岸のなまこしん

ハ、阿の事 阿の事としてぬかを岸のきん岸のなまこしん

ハ、阿の事 阿の事としてぬかを岸のきん岸のなまこしん

ハ、阿の事 阿の事としてぬかを岸のきん岸のなまこしん

ハ、阿の事 阿の事としてぬかを岸のきん岸のなまこしん

ハ、阿の事 阿の事としてぬかを岸のきん岸のなまこしん

阿の事 阿の事としてぬかを岸のきん岸のなまこしん

阿の事 阿の事としてぬかを岸のきん岸のなまこしん

阿の事 阿の事としてぬかを岸のきん岸のなまこしん

阿の事 阿の事としてぬかを岸のきん岸のなまこしん

阿の事 阿の事としてぬかを岸のきん岸のなまこしん

阿の事 阿の事としてぬかを岸のきん岸のなまこしん

阿の事 阿の事としてぬかを岸のきん岸のなまこしん

さく本綱時珍曰南越一種長鳴雞マカまよ座
火事ととこころよあししき鳴のきおきまふけてめぬおと
飛ぶ 飛ぶ
一色 志も鳴る 日 志むる 是れおとまよも予り飛

ハチウおとまよの事りめりなる

一書よおとまよを汝廣買よくハトヨとといひ山崎の園よ

てハラシカイとといふ

鳥

ハチ おほ

おほをそる 日本靈異記卷中行基大徳詠歌曰

加良酒等伊布於保乎ハ蘇等利能去等乎美亭下略

万十四よおほをそるやよえん散本集よとすもな

月経ひらりしはかきまておほをそるもいひしな

和布 日

おむする 花玉回一「日と花とと發をそるむる

おほ下まこく鳴をそるる

就鳥

日 日

おむる 「わろこほをそるお居をそる

おほをそる

鷓鴣

日 日

おほひる 深養父「おほひるおらるるいそのな

おほひるよひるひる

○志つとて 色系お發まよ志つとてハハハハハハ

の毛もわく敷もよなるやいお事あり「志つとて

なわらるるおほひるをそるあつとてはかきなるをそる

おほひる

鳩

能因 家たつ

二 鶉トリ 鶉トリ 鶉トリ 鶉トリ 鶉トリ 鶉トリ 鶉トリ 鶉トリ 鶉トリ 鶉トリ

鶉トリ 鶉トリ 鶉トリ 鶉トリ 鶉トリ 鶉トリ 鶉トリ 鶉トリ 鶉トリ 鶉トリ

鶉トリ

みなこと七音

○ こと七音 契冲沙说ことハみこと七音 洲鳥叙万十一大海

乃あつ磯石をさう翻あし(足さう)ほ(み)成(る)ぬ(る)ぬ

○ 志ある音 契冲師说万葉水長音と志あハハ音水

よながく居るあしと

○ 寛賀鳥 景行紀より

鶉トリ

いなおほせ音 結託抄云いなおほせ音ハなつ音

和名戸成いまおほせ音れをく(と)た人ハ志あ(る)く(る)ハ

そは、神丹抄云

よせたる音 夫本集麻彦(を)を(る)く(る)おほせ音

の(る)く(る)の(る)く(る)の(る)く(る)の(る)く(る)

いなおほせ音

つぎをく(る)音 日本紀私記曰止豆岐万奈比

止利又云止豆岐乎志倍止利

い、まなをく(る)音 古事記略歌云麻那婆志良表

由岐阿聞云字鏡云鶉求魚反豆々万奈柱と見

えり

○ ふをくまふ音 和名鈔訓

伯勞

伯勞ハシロ ことをとる 其の捕はむまぬひまわるといふこと
さくらをとり

雲雀

雲雀ハシロ いぬをみる 其のよ姫をたたくそあかき居るまの才よ

鶯

鶯ハシロ よみつる ようりもとをばたきよよまをばたきよ。鶯の
留時招免法を新あ次等とていつ。招免法ハ死者乃
復生を祈る事。ようり鶯の留時行ふといふを冥途を
なるといふこと。ようりもとをばたきよ。鶯の留時歌ヨミチ鳥我カ
ミとよるつツハ助流拾芥鈔云。鶯鳴時歌ヨミチ鳥我カ

雀

雀ハシロ キモトニ鳴ツナリ人ニテキ、ツコクタニモアラシ
たれとつ
みるせる 一、やまらねあうけことことゆふれよや、

さうりくつをたせを、

○さけ 集辨色立成云佐介

○いひとよ 皇極紀云。三年三月休留産子於豊浦

大臣大津宅倉云。天武紀貢台茅錫云。釋よニト

ヨハ集結異名なりといへ

かほよる 産地子云。是ふらうをたかこ対の名也

少好長醜流離鳥異名也。是ふらうをたかこ

少好長醜流離鳥異名也。是ふらうをたかこ

翡翠

かほよき 藤垣子よ世傳よそなとつふをくしそふにの
かふひはくのかほよきかきんふ時そ孫ハなうれなる。今按
よそなとつふをくハ古事記のよげを成そよといふ。然ハ
ニとナ通して俗をなすといふたふく

○そよ 古事記よよそくといふはあきささる事しとよあり

○そひ 和名鈔鳩 和名 曾比 東國の俗キヨモリといふやう一東野

よんしう

善知鳥

秘お

よなき 秘お 善知鳥のそひなるやう成らうあまて海をわ
くおとよなきを流えんひまといふとよはよきなり

とあよえんひなるをそよをわし 将得雛 志がし

ふまをのえんむなるといふ事いふとよなきハナハ

興字よてなきを成あかくはほきよなきとよなきは

ふのるをよなきのそよよてよなきといふ是名まはあ

らんもまらへんはて考まなきハ親をうとふといひ子を

やまといふといふ一書云けを砂中よかといふ成

うむ編沙おのすねをくといふといふといふ

鷓鴣

○いかさ 言 俗よえすめはしハ飛轉し菜園を去

云二條中破を言さいかろく成家傳つの中ハ

いふはよめうすといふはよそひちううとよ

を鳴ん

鷓鴣シヤイ

○たぐこを 東雅云多キリ巧婦ハ鷓鴣なり。そ菓を能く事取

たうらふけ名あり。並名苑。巧婦之名。蘆虎といひ

ハ誤り。和名鈔シヤイはひよを流をうけし。之。畧

鶇シヤイ

○たうべ 和名鈔云。似鴨。小背上有文多カ明マ本本見見

人ハ沖はわはうやれとわきとなきをうけし。たうべ

○あま休 万葉七山シヤイはあま休のわくわんその川

の淵は波くらなゆめ見牛云。俗よあいことし。あま

鶇の背は灰色此背は赤といふ。新羅集シヤイの鳥

の史よよとてしるあま休の音を

紅鶴

○つぎ 源順云。漢語鈔云。紅鶴和名豆木日本紀私記云。

菟花鳥云。菟花鳥ハ安寧紀よんゆ

○たふん 大系三竹よ。宗祇云。けをハなくともめらう

あまはうまのむさし。まらう。前を思ひおろつれん。あま

あまはうまのむさし。まらう。前を思ひおろつれん。あま

乃こかまを

鶇

○かたかうたき 古語拾遺令カタカウタキ片巫志止秘花抄

よかたかうたき。小名よ事とけん。あまはうまのむさし

○みことと 枕草子よ。えええ。天武紀。真白巫鳥シヤイ巫

をカニナキといひ。我ハミコといひ。ミコトリといひ。あまは

方目

○おそめとて 本草綱目云方目一名鳩一名澤虞
俗名護田鳥源順云護田鳥和名オヌトリ云東
雅云鳩ハコトバトトクハおたうバトハ鳩の漢音轉
して呼トクハ山田法師集云川つらうとあそひの習
俗ハコトバトハ江の浦とあそひの習ハコトバトハ
コトバトトクハオトオト

鶺鴒 ○クバシ 日本紀并和名鈔鶺鴒と訓を垂仁紀鶺
津列命年壯よなるまゝくものいひぬるを鶺鴒の鳥を以て
○コトバトとあそひの習ハコトバトトクハオトオト
白鳥は字音誤としてハクテウとつよまをいふ

蒼鶺鴒

○みとさ記 崔禹錫食經云鶺鴒有_二種相似而小色
蒼黒有_二水湖間漢語抄云蒼鶺鴒美止佐木散_一者集云コトバトハコトバト
よたてはあそひの習ハコトバトトクハオトオト

鶺鴒

○にはは 漢書よ不及あそひの習ハコトバトトクハオトオト
鶺鴒 ○かやくと 和名鈔云雀鶺鴒小鳥也和名加夜久木高本能
○宣集よかやくと記とくとたのむ花蔭あつてを食ハ
まぬらうはかやくと記とくとたのむ花蔭あつてを食ハ

葭原雀

○たぐミ鳥 魚名苑注云巧婦和名太久美止里好割葦皮食

かせき 景行紀 白鹿シロキカセキとよみくし

こたうろ、かせきけけらうり記よせうよせういからんよせうよせう

赤條美「朝はあやきとて城あくとんははるかにせき近くだとて

くろ

秘蔵 かせき 「秋はあやきとて城あくとんははるかにせき近くだとて

はらひ草 六月麻の異名しとふらまにたよまてい

志なるとり 待法抄、新経抄下におけまて城まかとのとら

いふとてけ後ふまかてし志かとのとりのり、神布ねよ後、

あくのせう、契沖の鴨鳩なくやいもれう、久志の鴨、

いふ、花玉よふすかを

貉

秘蔵 たらん志、 河守八人備儀所下よと

猫

あさくま、ぬ 「さよゆもてあさくまぬよあひぬうて

いぎく島のうらふまてなく、

貂

○ふるま 和名鈔黒貂 和名布流木 源氏末掃花よふらてしむら

○ふるまいとふるまうらうけし、 抄巻末よふらてされかすまぬ

を言先かぬ入道おもくを、 江次第よ重明

親王著黒貂裘八重事又し

鼠

秘蔵 みえいこくま 花結ちりかぬ

○よめ結こ 定歌つ葉よ、たよのよめ結き、 城ねとて

くいしをきんて「うんのかはらまのたよまていけらう

こく、なまんとやあしんせ

鬼

秘蔵 結しみ、 「まあまのふまらう下をきんてねわよとて

猿

徳同
月 子 女
お 志 心

お 志 心 2 月 子 女
お 志 心 2 月 子 女
お 志 心 2 月 子 女

○ 志 心 2 月 子 女

○ 志 心 2 月 子 女

お 志 心 2 月 子 女
お 志 心 2 月 子 女

狸

お 志 心 2 月 子 女
お 志 心 2 月 子 女
お 志 心 2 月 子 女

お 志 心 2 月 子 女
お 志 心 2 月 子 女

お 志 心 2 月 子 女
お 志 心 2 月 子 女

狐

ひとり人として名はのうちにたうきなりなり。ひまをくりにて
 おもひよ秘蔵おまゆのとき人きりしんまをひきひいてい
 らぬのうちにそと火くやうのとき、ハ狐はなり。となら
 人志ハ狐合字といふ。篠月よぬとまをよとハかまをひきをたう
 といふ。同一方とんぬ。狐と狸のかうめのこといふことよ
 ろしきまら
 まよを志る。 「おひきをなめてあまらうきまハ、ちてはし
まのほうにみまをたんとよ
 いおたうめ。 河海抄云。刀女ハ狐なり。新宮寮刀女是
 狐事也。一説伊賀伊勢國よハ白狐をたうめ水前と
 りつて。新猿樂記よ野干キツ子坂之伊賀專女男祭ウツりま

獺カツノ

○きつ 数も多よきつひおなく城せめてこし人たさうゆと
まけちねをまきとなくまらうてあをれとてまき
 ○をそ 兼名苑獺和名 寺の中ハをそとてたもれのためと
乎曾
 たりてまれくのところわらうれ。狐服云。獺といふけたもの
 いたるおれよひあはほむにそてハといひまらうといふ。これ
 きたもまらうてはらうちなとらう人ををそそのたれ
 とつていふ

海驢アレカ

○みち 一書云。海驢アレカと訓を。是れ北まらうの和名鈔
アレカ
ハ 華鹿とんて。寺島氏云。海鹿好眠每島上ニヒ
切 睡る夫本世ハ。ふ表ハ海驢のねなるつとめやぬゆえ

蜻蛉 ヤニハ

△虫蛙

秋キつむ志 キ わらハ日本紀の訓なり。既ニ地部秋津洲

乃所ノまハ了

あきつアも ア 万葉云。秋つては袖ふス妹イとトあり。蜻蛉トハ

まマらハハ人ニをシりトいフ。人ニをシトハ。和名鈔云。胡黎蜻蛉

之小ノ而黄也ハ。和名キキ又赤卒蜻蛉小ノ而赤也ハ。和名アア

ア。今所謂ヤニハハエニバノ蜻蛉ナリトイフ

○かけろふ 和名鈔蜻蛉一名胡螯ハチケケロロ

蟋蟀

蟋セやヤまマろ

つツくクとトせ 家持集云。つくとせは蟋蟀と云ふ

奥義 蟋蟀 道達集云。蟋蟀をてつくとせと云ふ

ふフてテつツむムし あきさ等の信してなるはつとせ

秋アキもモつツとトはハ茅チはハよヨかカおオるル なる者よわ

ちチ、ろロむム志 ちろむ志は吹風やむかしし文意ハ

とト、よヨわワるル者モノ也

蜻蛉ト 蜻蛉のトとせしよ鳴るや若草の根乃志

事コトのノよヨきキ 詩幽風云。六月莎鷄振羽是也

物モノをシりトハハ予ヨのノ別ワ記キ 也

○ちくろと 夫木十郎旅宿養源仲正「ちくろと」の

枕の妻あなまよわくして鳴かせたりと云ふあり

ちくろと養能異名なるべし

養能

養能

「よつとまたのらん川に夕とれよかきや、此のま

新、力出よなり、

○夜を志は虫 名書よ中務に祝言「水とこと若る此池

乃夕やまに夜を志むし此の夜そ日の光く

蛇

あやめ

法外「国志」の座のふらと蛇よそたうら引もあやめ

ねよそとさうれとめとをあやめとて女見るとはち

なえまをさこそいと。ちたれまハ蛇ハ蛇と云ふ事

手抄よんゆ

○をろち 和名鈔蛇、和名倍美、一云久知奈波、日本

紀私記云、乎呂知云

○ちハ 古語拾遺注、大蛇謂之羽、云々

蛇脱

○む志能たきさぬ 「友ふつむむし蛇にたきぬ結ひあを

て通うらうらふ野への旅人、とま本葉よんしつ、

蜂

まがは

万葉の流るふ葉の麻能下よ妻

蝶

○かちひらこ

字鏡云蝶、加波比、蛭、上同、和名鈔、山削を

まじり

兼蟲

鬼結子

ほろゆきよみのむいといとあそれならおまよう

とちれむおやよめて。ももねそらうしこころちそあらん

て。おやのあしこねぬひよきせて。そ秋風のふかんたうよ

ぞこんどまそよまゆひくふかていよならもきんぬぬの

おまきまうて。ハ月さうよなまをちんくしこまのつな

くふなくいさうあそれしこままま集ま集ま集ま集ま

んおやのちもきん使して秋風のむみのひしこま

よん

蛙

川カキ

川カキ

川カキ 蛙も集まをさうしこまくしよ共よ

まけてまををさうてねま集ま集ま集ま集まの下者の川

すいふま集ま集ま集ま集ま集ま集ま集ま集ま集ま

蟪螂

○いぼむ志

和名鈔云一名蟪螂

和名以保無之利

○いぼ志

新猿樂記。蟪螂舞之

頸筋云。塔中納

すお流よいほ志のむつらうがれしあはれてとらう

蟻

○かむ志

和名鈔云一名烏毛虫

和名カ塔中納

お流よいほ志のむつらうがれしあはれてとらう

お流よいほ志のむつらうがれしあはれてとらう

白魚

○志

和名鈔云。衣魚一名白魚

和名カ塔中納

おの流よいほ志のむつらうがれしあはれてとらう

頭蟲

○ぬらほさむ志 和名鈔云。蟲之細微者觸之輒叩

頭和名治如豆木無之法少能之云ぬらほさむし又わをれなり云

らふらふ道心なすくはさわくくむ又ふかきどく
らふらふほろろとたつうつけくそをうくれき

蟻

○まろむ志 和名鈔云。一名蝓和名須久毛無之

蠅 ○まろむ志 皇極紀云。三年秋七月○取常世蟲

置於清座字鏡蠅と訓と

蟻

○まろむ志 和名鈔云。一名蝓和名須久毛無之食糞蟲也

こがひびーのゆるきあるる蟲は尾七毒ふわる

蟻

○ひをむ志 原氏談云。蝓はうそのしをむしとけり

んと云々花鳥録情又郭璞詩借問蟻蝓輩寧知龜鶴

年といふ句は引きたる。細流も蟻蝓と云々寺島氏

蝓をセンチバチと云々今按之。和名鈔云。蝓漢語抄云。

比年唐韻云。朝生暮死蟲也云。順ぬー既よかくいつ云

たふつふ奴センチバチハ人かきくどり出て。あまの六

まふもゆもさるる。字書云。蝓朝生暮死蟲生水

上。状如蠶蛾。一名慈母。蟻蝓本綱云。一名渠畧似

蝓而大如指頭。身狭而長。有角黃黑色。甲下有

蠖ウヰ
蠖ウヰ

能飛。夏月雨後叢生糞土中。朝生夕死。又曰。或曰蜉蝣水蟲也。狀似蠶蛾。朝生夕死。志云。ハ。以爲一種の蜉蝣ありて同名を授け。又蜉の異名也。

○をさむ志

和名鈔云。說文云。蠖

和名乎。岐無之。今按。以蟲

行。則必起背。故云於岐無之。故乎の假名未詳。字

鏡云。蠖。蜉蝣也。屈伸蟲。衣比万良虫

蝻ウヰ
蝻ウヰ

○よるむ志

和名鈔云。穀米中小黒蟲也。

和名与之。今

俗云。コクウザウなるよなむい。ぶらむいと相通

斑猫ウヰ

○ふらつバ

同書云。地膽

和名仁云。東雅云。俗斑猫

り。是。カ。ス。云。本草類編云。斑猫和名未女無之

蟻ウヰ
蟻ウヰ

○やまかバチ

兼名苑云

蟻。夜万加。知。

蝮ウヰ
蝮ウヰ

○たちひ

古事記下。定。蝮。部。

○かまぼろ

和名鈔云。一名伏翼

和名か。波保里。まをまよ

い。く。も。い。ん。え。ぬ。あ。ま。を。け。う。は。け。う。そ。う。れ。か。り。なる

蜚蠊ウヰ
蜚蠊ウヰ

○つねむ志

同書云

和名豆。乃無之。

寺島氏蜚蠊ありむと

本草類編云。蜚蠊安久冬といふ。クとフ。夕とラ。同讀。
 貝原氏わづむ。ハ。晒蟲之とそ。マ考

各物蟻

○いぬつこころ 和名鈔云。一名春黍和名以初言

馬陸

○あまびこ 同書云。一名百足阿万比古蜈蚣と混る。一

堤中納之物語云。わづむ。ハ。晒蟲之といふ。やうなものをいふ
 とく。虫の名をわづむ。ハ。晒蟲之といふ。やうなものをいふ
 せりこころ

異名分類鈔卷之四目錄

△草部

- | | | | | | | | |
|--|---|---|---|---|---|---|---|
| 薄 <small>スキ</small> 女 <small>メ</small> 郎 <small>ノ</small> 花 <small>ハ</small> | 夕 <small>タ</small> 顏 <small>ガ</small> | 菘 <small>ス</small> | 梅 <small>ウメ</small> 子 <small>コ</small> | 麥 <small>ムギ</small> | 白 <small>シロ</small> 茅 <small>ハナ</small> | 鼠 <small>ネズミ</small> 麴 <small>コ</small> | 鞆 <small>ツツ</small> |
| 龍 <small>リウ</small> 膽 <small>タン</small> | 蘭 <small>ラン</small> | 朝 <small>アサ</small> 顏 <small>ガ</small> | 姬 <small>ヒメ</small> 百 <small>ヒャク</small> 合 <small>ゴ</small> | 紫 <small>ムラサキ</small> 陽 <small>ヤウ</small> 草 <small>ソウ</small> | 牡 <small>ウシ</small> 丹 <small>ニ</small> | 蕨 <small>ワレ</small> | 若 <small>ワカ</small> 菜 <small>ナ</small> |
| 桔 <small>キ</small> 梗 <small>キョウ</small> | 紫 <small>ムラサキ</small> 苑 <small>エン</small> | 露 <small>ツキ</small> 草 <small>ソウ</small> | 山 <small>ヤマ</small> 丹 <small>ニ</small> | 杜 <small>カキ</small> 若 <small>ワカ</small> | 蓮 <small>レン</small> | 山 <small>ヤマ</small> 吹 <small>フキ</small> | 土 <small>ツチ</small> 筆 <small>ヒツ</small> |
| 菊 <small>キク</small> | 萩 <small>ハギ</small> | 萩 <small>ハギ</small> | 夏 <small>ナツ</small> 田 <small>タ</small> | 菖 <small>シヨウ</small> 蒲 <small>ボ</small> | 葵 <small>アオイ</small> | 藤 <small>フジ</small> | 蓬 <small>ホウ</small> |

胡瓜 木三九 櫻芋 橋三 松三 擬三 神三 杉三 胡類子

茶 合歡木 紅松 李花 柳枝 昆布 木部

寄生 檳榔 讓葉梅 楊梅 檜花 桐花 棗花 梅

松茸 蜀椒 石楠 梨子 椿 棟 躑躅 冬梅

草部補遺 自三十一 至三八

冬菊十九 菱三 大角豆 芭蕉三 虎杖 升麻 忍草 稻 旋覆花 水葵 龍二九

洋芋 韮 小豆 鼠尾草 茶 朮 萱草 雁來紅 麥門冬 大凝菜 生薑

管根 大根 蔥 葛 酸醬 木芙蓉 薔薇 射干 數柑子 水松 稽

藻 大豆 蔦 日蔭草 芋 黃連 紫萼 王孫 蘭 竹 豌豆

樞

茯苓

松球

木部補遺 自五十四至五十四

異名分類鈔

草 △草

かやのひめ 神代紀生草 祖草カヤノ野ヒメ 亦名野樞ツツ 是なり。日本紀竟宴歌云「と」のまや若花下
の姫母ヒメのまよのまゆむ

○草かやひめ 經啓朔長夜言合。登蓮法沙「秋の野花」
心をもをりしよりまよのや姫とあそむるを
さいたつよ 森撰或曰「古人説その地名又そのまよ
つよといふ。虎杖といふ説不用」此へんまよをたよひの力
乃らつるまで万たうらわさしむるを

若菜

子代菜 たね 藤菜 たね 子代菜 たね 子代菜 たね 子代菜 たね

薑

一曰 物菜 莫借抄曰 一曰 物菜 莫借抄曰 一曰 物菜 莫借抄曰

一曰 物菜 莫借抄曰 一曰 物菜 莫借抄曰 一曰 物菜 莫借抄曰

一曰 物菜 莫借抄曰 一曰 物菜 莫借抄曰 一曰 物菜 莫借抄曰

一曰 物菜 莫借抄曰 一曰 物菜 莫借抄曰 一曰 物菜 莫借抄曰

一曰 物菜 莫借抄曰 一曰 物菜 莫借抄曰 一曰 物菜 莫借抄曰

芹

根菜 芹 根菜 芹 根菜 芹 根菜 芹 根菜 芹

一曰 物菜 莫借抄曰 一曰 物菜 莫借抄曰 一曰 物菜 莫借抄曰

一曰 物菜 莫借抄曰 一曰 物菜 莫借抄曰 一曰 物菜 莫借抄曰

一曰 物菜 莫借抄曰 一曰 物菜 莫借抄曰 一曰 物菜 莫借抄曰

鼠麴

○み、なま 枕草子云七日は鼠麴の葉はらひよきてさわきて
 一、同めとけうなまよふつせれをれあまうつていふ
 ともちうけく、今按、本草綱目麴の種名、佛耳鼠耳、
 耳葉、正月七日、七種の内、佛取と云い、鼠麴といふは
 ぬら正月七日、結わらまを、よはよめてさわきてやいふよく
 なう、但、貝原氏、鼠麴、似つるといふ、何れぞ、
 和名鈔、菴蘆子、本草類編、馬先蒿
 ○ごぎやう 人は七種の葉よび、公事振源云、鼠麴ハ
 七種のおし、箭ヤチをらうらチキ箭チキ佛取ゴキョウと、まろ佛の府フし、
 は佛取先達の説、鼠麴なること、ハ、

蒲公英

○よごご 日重上人、すま云よこまのたは、
 事といふ、
 ○さ 草あまは、
 川をのり、
 いら、但、和草ワクサと、
 考、

○ふぢま ○たま 和名鈔云、蒲公草、フヂナ、一、タナ

土葎

蓬

蓬フヂ 花
 かくもくさ

はくろひくさ 一五五五の志けりす
くろひくさのいよこさ

くろひくさのいよこさ

○さ志もく林 神中おふらりてふふと
さふとへふてふとをりふ差

蒿しきふてふふとをりふ差

「あはれなむいふふのひはふてふふとをりふ差」

「契りてんらうてふふとをりふ差」

「いふたのめまをちてふふとをりふ差」

○たちれふ 一書ふんせ

白茅

○たのふそ 結債おふてふとをりふ差

まはたのふそをりふ差

山

はちふふ茅十をりふ差のうそハ海原英鳴菜なる

皆人志るなり而たのち勝るに勝る英鳴菜なる

しる且莫鳴菜漢語抄用神馬藻字據之馬ハ

白茅以茅ふは白茅を芦毛馬といふも芦のたふてふ

まは茅花してまははして彼をめてまはなまは神

馬藻といふ故にたふし

おをひくさ 竟憲深秘抄云白茅花のふをりふ差

よハ九月中といふ但為重てふ首の歌ふまの月茅花なる

也子まをあまをてふてり列とんゆ先ず寝殿の時も持ては

はわり也いふハ茅花をてふてり列とんゆ先ず寝殿の時も持ては

う下なる也は茅花をてふてり列とんゆ先ず寝殿の時も持ては

藤

とよきうちとて茅の葉ハ枝なるとま一筋くせり
ハ縁念たふと事しよせとてさうのつとそ

紫結らり 朗詠紫塵爛チリキ藤人拳ケン羊ヤウとあり 堀川百三

むらさきのちうちけしき昔のこゝれをたやむに物な
して、色紫和羅よ藤のこゝれをたやむに物な
しとてばふの藤といふべし

旧 ち志ろ

山山根根葉葉 夏借お月一山根まおて山根のうらまはかり

とねはてかこしなまむ

山吹

源因 ともは

山吹山吹 花玉ままむり男女あつてわら色はる

時鏡又面鏡をきこひさうつしてそ鏡を世を早其に
さう山吹生い出なる昔ハ志長物語とていふ人
の面鏡花玉をそとせり鏡の名はなるとむ

か、みくさ 「たてのさや花玉といふとをー鏡花玉と衣

の名結うらむ

藤

二季二季葉葉 まよりふよかなて候と二季葉とソあか司と

そなるたしとんと二季葉のたかかほななりと

むらさね葉 「ねのふらうしんてんがとくくはまの

いろ結てなま

ねん葉 「そわなをうあましとてさくくくねん葉と

花はさくら

○休のかたがとま 仙毫おとほのつらなる花はよく
まけいふよたの事かたがとまのかいとくよとくとお
角たつふふふたつとくふとくふ十たのかたがとま

藤月

おつあまの「おのまき」は梢多るやねまるとたの

あつは

麥

秋中

こぞく「おのまき」は梢多るやねまるとたの

はらうかまきまき

まのり

おのまき「おのまき」は梢多るやねまるとたの

まはらう

○志や 猿樂記に麥城シヤリと云を

牡丹

八重

ふかこく「和名鈔一名鹿韭和名布美久佐まはらう

おのまき「おのまき」は梢多るやねまるとたの

名

おのまき「おのまき」は梢多るやねまるとたの

おのまき「おのまき」は梢多るやねまるとたの

おのまき「おのまき」は梢多るやねまるとたの

おのまき「おのまき」は梢多るやねまるとたの

おのまき「おのまき」は梢多るやねまるとたの

おのまき「おのまき」は梢多るやねまるとたの

おのまき

牡丹詩花開葉落二十日牡丹花集

牡丹詩花開葉落二十日牡丹花集

おのゝいろし

どなまよ

秘花集上因院おつくとやつりてな

むらゝんまゝいろしつなま花さうなま

○もつらま花なな 日まとら人まちよ花め花まちま

ままままの花とりまま

井氏 板白ま

蓮 花まなままま 花ままままま

小池中もあ 桜ま崔豹古今注云芙蓉一名荷花一

名水花云

池見見ま 花ま集同一新うま花まもん池ままま

こからままままま

池見見ま 花ま集同一新うま花まもん池ままま

よまて風の花まま

小池見見ま 花ま集同一新うま花まもん池ままま

うまはまの花まま

葵

葵ままま 花ま集同一新うま花まもん池ままま

ままままの花まま

ままままの花まま

續善の庵集より「...」の二葉に...
ぬわ...
...

口 ころ... 掛を...

乃...
...

口 かけ... 異名よく...

て... 子... 夫の...
...

口 是... 又... 兔葵...

は... 夫... 日...
...

口 紫...

口 ...

子ながらよかめておやまのむ

庭ま

取んま

唐の王の花をぬてまむおあはれめうちうられらる
中よあつひをぬぬありてそほら崩津なめて弦よ
あつらあひひをぬぬあなまむあつひとかくこ
と申しこおまはらうほりてたのたままら
こ取んまをと何をいま

穂子

時くらまら

石竹 本綱瞿麥釋名石竹とあり万葉にも石竹と

あつらあひひをぬぬあなまむあつひとかくこ

漢傳

かたみくさ 莫付お云若大和國よ人む子のがそ

をうつりてまらまは死してお家子おけり

てまらまをりなり引てんむまら

の取んまといひ我が神ぬまむまもまら

この花まらなる人のまら

なつらまら

神のまら

とこまら 縁材お瞿麥をなす

とこまらといひまらし深庭庭を瞿麥の津と

譯常の花といひまらし常とハげ花及秋と

わらわをたねをきりて常なるいふ者なりと常の成りし
万葉よりそのやをよるなりと常なるいふ者なりと
是れなり

紫陽草

はひらね花 六帖「わらわさひひらねとらた」
かの花のひらひらひらひら
○またふりて言をまよふ
○かゝるるま 同
○ともと 字鏡云 使左井 又云 止毛云 異同考
一一

杜若

^{美作}かはよちを 花玉同「玉の軒ふくふく」
お社まゝむらさき花といひと後
かはよちをこゝろにまよふといふ万葉のいふ
向よせひらかはをまよふ
^{秘中}花の玉

菖蒲

^{美作}吹毒草 吹疑 菖蒲 吹次の方と玉の軒ふくふく
いふ「大内や玉の軒ふくふく」
わらわ
白ん草 「名う」
こゝろをまよふ 白ん草は誤なりと云ふ

ちりなる地本あり

菘

菘うつこ かつこよ云 能因ま抱よかつこといこも城
いふ花うつこといこもの花をいふ云 古人の説多くい
こいこも城いふといふこといこもを契沖波をいふ帖よこもの
かようつこをいふ云 こといこもをいふこといふを非し云 今按
よい帖よせう花かよこく城出さう 而契沖と云くハ芹こ
と回せういふ云 いうなる花かつこのこといふ帖よより
帖しといふ人多くいふこといふなることいふこといふ
んされと古説よさういふ云 菘の異名とんはさし
よやれふし葉 是かこといふこといふこといふこといふ
二二

ふし志む 三のふし葉なることいふこといふこといふこといふ

一六月花

姫百合

光葉 友花野をいふこといふこといふこといふこといふ

草花

山丹

○さか 山丹の太古花名さかと云 古事記 神曰 其川 謂
佐草川 由者於其川邊 山由理草多在 故取山由
理草名号佐草川也 山由理草 本名云佐草也

夏田

秋待草 水く多く秋待草のよまぐりこといふこといふこといふこといふ

何しろ

水^日う草^日 一 我田の西よ秋^日 一 ありけ草
そかり^日 志^日 は^日 なる

夕顔

たそ^日 かけ草^日
ま^日、けの花^日 「夏の日おほく^日 暮^日 め^日 一 ち^日 草^日 ま^日 け
の花^日 ち^日 や^日 と^日 暮^日 一 なる

朝顔

夕^日 かけ草^日 一 草^日 半^日 花^日 一 夕^日 かけ草^日 ち^日 名^日 お^日 つ^日 け^日 一 なる
但^日 草^日 十^日 一 草^日 半^日 花^日 一 夕^日 かけ草^日 ち^日 名^日 お^日 つ^日 け^日 一 なる

夕^日 かけ草^日 一 草^日 半^日 花^日 一 夕^日 かけ草^日 ち^日 名^日 お^日 つ^日 け^日 一 なる
白^日 横^日 一 夕^日 かけ草^日 ち^日 名^日 お^日 つ^日 け^日 一 なる
朗^日 詠^日 一 横^日 ア^日 サ^日 カ^日 ホ
把^日 一 夕^日 かけ草^日 ち^日 名^日 お^日 つ^日 け^日 一 なる
か^日 一 夕^日 かけ草^日 ち^日 名^日 お^日 つ^日 け^日 一 なる

夕^日 かけ草^日 一 草^日 半^日 花^日 一 夕^日 かけ草^日 ち^日 名^日 お^日 つ^日 け^日 一 なる
鏡^日 一 夕^日 かけ草^日 ち^日 名^日 お^日 つ^日 け^日 一 なる
か^日 一 夕^日 かけ草^日 ち^日 名^日 お^日 つ^日 け^日 一 なる

露草

いり

おまひ草 道具つ後

けまふさ 仙覚のうたに月草のまほしきものなり
日影よとて涙をばけたは月影の涙む月草のうたなり
今按ふ方集草より仙覚の涙とまほしき月草のまほしき
涙夕の清ぬるつこい草のまほしき月草のまほしき
説りけりし仙一のまほしき草のまほしき月
草のまほしき草のまほしき月草のまほしき
頭草の本名よくまほしき草のまほしき月草のまほしき
んまほしき草のまほしき月草のまほしき

かりなる命ともよき草のまほしき月草のまほしき

おまほしき月草のまほしき月草のまほしき

百

草のまほしき月草のまほしき月草のまほしき

泪林採葉云百草のまほしき月草のまほしき
けなありとあり月草のまほしき月草のまほしき
草鴨頭草和名抄鴨頭草月草のまほしき月草のまほしき
なり百草花咲説もいふ草のまほしき月草のまほしき
はけぬ草のまほしき月草のまほしき

おまたくさ 仙同よとて秋を帯てそ草のまほしき

いらよわもゆるさ草のまほしき

はて
え草

萩

萩中 萩つ志の花

志のなぐさ 和名 萩 波木 萩よけ

名あつ成つし いづれ 萩 波木 萩よけ

よ 萩 萩よけ 波木 萩よけ

萩よけ

萩よけ 波木 萩よけ

あつし 萩 萩よけ

萩よけ 波木 萩よけ

萩よけ 波木 萩よけ

萩よけ 波木 萩よけ

萩よけ 波木 萩よけ

濃深草

古萩草 濃深草 萩よけ

萩よけ

萩よけ 波木 萩よけ

萩よけ 波木 萩よけ

萩よけ 波木 萩よけ

萩よけ 波木 萩よけ

萩よけ 波木 萩よけ

萩よけ 波木 萩よけ

萩よけ 波木 萩よけ

女郎花

お七ひくさ 女郎花 萩よけ

萩よけ

紫苑

草我なをさうと花と咲も。花玉云。花を思ひ
まといふの。事院せんといふ。是より。天智天
皇草花異名といふ。唐といふ。又此紫苑とも不名。但し
勿論。又梅を。他因は。少い。多る。と
ふちは。この。漢書。或女。能。行。て。死
し。る。を。後。を。見。る。は。不。甘
○あらいぎ 允恭紀云。壓乞戸母其蘭一莖と云々
および。こま。願。胎。云。お。よ。の。ま。こ。ま。と。別。の。ま。は。ま

名。六。あ。い。の。管。子。と。い。ふ。但。し。管。子。は。名。の。あ。い。の
音。が。ま。よ。う。う。て。の。説。な。り。ま。の。中。抄。を。う。ん。と。し。縁
流。あ。い。の。ま。こ。ま。と。い。ふ。を。の。り。を。い。ふ。と。い。ふ
能。因。く。さ。ま。の。り

○のー 和名鈔

○ことなま。壺。中。抄。云。は。ふ。花。を。冠。り。の。花。と。さ。し。壺
を。諸。悪。無。事。よ。な。り。と。事。な。し。ま。と。名。付。り。し。後
撰。十。七。巻。に。か。さ。ま。の。ま。こ。ま。と。い。ふ。な。ん。と。い。ふ。事。な。し
ま。の。り。の。り。の。り

萩

○かの。ま。た。字。鏡。よ。い。の。鹿。舌。萩。葉。な。り。の。似。し。る。ま。た
萩。知。葉。一。萩。葉。し。て。萩。ま。の。子。能。風。よ。り。也。老。の。た。ま。也。乃

ゆきしほのうらみ

山下草 藤垣子回一「夕たれの山下草花のおろし」

松吹草 ころも音花さしり

風持草 ころも音回一「おろしころも吹さる音のうらみ

まゆ風持草 ころも音のうらみ

まよこ草 「まよこ草はまよこ草のうらみ男の風花はまよこ

ころも音のうらみ

かさめ草 藤垣子回一「林とくさのうらみおのうらみ

あま風わかまの園とわらわむ

同色草 回一「昔は色花のうらみおのうらみおのうらみ

あま風わかまの園とわらわむ

薄

久見草

風守草 藤垣子回一

糸なうら草 ねもをうらねをてぬあねなうらうら

うらとまゆ風を吹風

あま風子 英付抄回一「家前草屋よお一まのうら草よか

あま風子 英付抄回一

あま風子 水はなり一風とまゆて波はうらあま風子よあま

あま風子 水はなり一

見たま草

神波草 是の屋花なりとまゆ

みくさ 仙覚抄云みくさとまゆまゆ真草花我まゆ

まゆとまゆ一「あま風子まゆとまゆ花乃あま

あつたてをきししつらあつたて

○神ふらま 隣女まよ 蛟野神「かまゆらうのくまを
けし神あうまうさうすなうし」蛟結るかしのくま乃村
まことたのむ信もやまらまゆらんとしあまこなまひ出
せり。神ふらままほし

龍膽

○えやこま 和名鈔よ志ういづ。瘧をえやこまといひ
瘧を治る功あうまやあん

○たつねもくさ 延喜式典藥寮よりんゆ
お七ひま 河津採糸云。家よりアんだうをぢひま
根原くまて付用之ま。葉極黄つ「根おれまよ」

あまのまをえやこまをうゆしむさうのいづ

くたよ 苦膽ククニアんしうね一名しま。道達院殿説よ

若膽わがたんのいづやくとまましきまゆやくハ本綱云謂い載
采なりといふ。たぐい集お名よ。くたよとあまを。教長

つハ秋のちひさうたやうなる花のけら。けけのくはくたん
と中なるま。又苦丹とまて。牡丹の類ともいふ

いもま

いもまひこま 字鏡よりんゆ

桔梗

一くわ葉は「このまをむらうし」こまを藤目

あまのまを

菊 菊の字は元 漢書に菊とあり、

之を今按じ時名和名抄に之とあり

菊の字は元

○をのび、元 本草教編に之とあり

菊

菊の字は元 漢書菊名に之とあり

子に之とあり

和名に菊とあり 元和國之菊に之とあり

本草に菊とあり 元菊名に之とあり

菊の字は元 漢書菊名に之とあり

菊の字は元 漢書菊名に之とあり

菊の字は元 漢書菊名に之とあり

菊の字は元 漢書菊名に之とあり

菊の字は元 漢書菊名に之とあり

菊の字は元 漢書菊名に之とあり

菊の字は元 漢書菊名に之とあり

菊の字は元 漢書菊名に之とあり

菊の字は元 漢書菊名に之とあり

菊の字は元 漢書菊名に之とあり

菊の字は元 漢書菊名に之とあり

菊の字は元 漢書菊名に之とあり

菊の字は元 漢書菊名に之とあり

菊の字は元 漢書菊名に之とあり

菊は秋をくの花と云ふて秋こそこの花也

秋は花 藤屋草よりこそ菊はむかひと云ふに物よきと云

むとめ花 山は菊 長月花

いにて菊 長月の九日まじくいにて菊は花をハきりて

万代そ経ん

○菊はあふり 堀に渡りては匡房の菊もあふり菊白ひハ

らー菊は花むいこそ菊のあふりこなり

花の菊 花は菊とりて菊もあふり菊はよおとれとて咲ゆと

とぞま本は菊照りて菊は花のあふりとなり菊はこいそ

よのこい菊はあふり

菊

初見菊 莫得抄菊は同く一と云れあふり菊はよふりも

初見菊は花よふり菊は長く人花よふり初見菊は花

よふり或は寒菊よふり菊はこいなり菊はこいなり菊

よ初見菊は花よふり菊はこいなり菊はこいなり菊は

菊はこいなり菊はこいなり菊はこいなり菊はこいなり

菊はこいなり菊はこいなり菊はこいなり菊はこいなり

菊はこいなり菊はこいなり菊はこいなり菊はこいなり

秋は菊 花は菊は同く一と云れあふり菊はよふり菊

かきこい菊はあふり菊のあふり

のこい菊

寄^秘見^秘草 美傳が日一「志」まじりてふらふや^秘の美見草
秋のあまうてたかむ草

萍

か、み草 日一「波」なるとはまをきくかみ草は乃

池の水の花名

菅

み^秘草 日一「波」なるとはまをきくかみ草は乃

をふくめてつるのまうのぬたうと

藻

海菜^秘草 古く東名花名よかをなるとあり。彼草の秘草

とてまじりて河骨とまじりて。契沖はまじりて。水苔と

名河苔 ^{和名加} 是なりとまじりて。和名秘よと藻と水苔と別

物とまじりて。藻と文選よ。海苔之葉とあり。此の

藻の葉とまじりて。藻と

菱

み^秘すも草 日一「池」の草吹風のゆきまじりてはよか

草

よ^秘か草 日一「池」の草吹風のゆきまじりてはよか

よ^秘か草 日一「池」の草吹風のゆきまじりてはよか

のこしらひの草

波草 日一「池」の草吹風のゆきまじりてはよか

波草 日一「池」の草吹風のゆきまじりてはよか

氷草 日一「池」の草吹風のゆきまじりてはよか

氷草 日一「池」の草吹風のゆきまじりてはよか

日一「池」の草吹風のゆきまじりてはよか

日一「池」の草吹風のゆきまじりてはよか

さうは 藤原系より「波は江の波風づくあまは」
よ名もさうれくそ葉もやはらなま

玉えくくし 秘花抄同一「あまを江の玉えくくそ花
はのえんを駒もいさえうせいかさし

演萩 伊勢国よハ芦を演萩とつうし。古人の後人
の知る所し契沖師を演萩ハ演よせける萩をつうし

も伊勢ふよかえりく。丹後のうさみ浦よも演萩を
よめり志らるそ萩波の芦いせの演萩とつうし後據もな
き萩なるゆと。人のおきひし。かきさうよなれり

大根

か 漢 花玉蘆薈も同一大内にて解めどおく大

根がうさうさなるお中ももやさかみまや。その山調よそ
かへきりれ散本葉よもさるえはつらみのおまは志らお
さけりくろ「えんをのさきもさうらひのかみまは。さうえ
さうさうさう」か

ら、まろろ 人日七種の菜よも

○このえを 願取云萩論云このむとハ大根の花し孫

姫式云浪華津之蘆薈送三冬而大著二月に順和

名よ蘆薈也 大根

大豆

萩の菜 花さうは同一「あまの田よ香とん」も萩を

よめりそめのも花のなをえ

大角豆

大豆

前草 同く 秋なるを以て名をちんたんとするは花の
咲く時と云ふべし

小豆

散く 理字 同く 秋なるを以て名をちんたんとするは花の
咲く時と云ふべし

ト枝もたよむる力あり

愈〇うつけ草 けさ草の中 空なるを以て名をちんたんとするは花の
咲く時と云ふべし

葛

松葛草 同く 秋なるを以て名をちんたんとするは花の
咲く時と云ふべし

葛の花は七八九月開くはつと云ふは名をちんたんとするは花の
咲く時と云ふべし

流麻

芭蕉

芭蕉草 花は芭蕉葉の如し 芭蕉葉は芭蕉の葉に似たり
花は芭蕉葉の如し 芭蕉葉は芭蕉の葉に似たり

鼠尾草

水かけ草 花は同く 秋なるを以て名をちんたんとするは花の
咲く時と云ふべし

玉岩草 山の草かな 花は同く 秋なるを以て名をちんたんとするは花の
咲く時と云ふべし

の語

葛

相喜ま 秋入ると花は紅花喜まかきる花は入ると

なまはけはあきの苦の方よりよく似る。葛はははふとさし

も一筋の葛は葛花の語の似たり。相喜まといふ葛

草は志けくさしうさして。相喜まといふぬさうさして相喜

うさうさといふぬさ

日蔭草

○か、みま 新式とあるは口蔭草といふかきと子蔭

乃教なる。狐れをそとと云。又かみまといふさ

虎杖

○一葉の葉 回書といふ葉は葉はまきしうさうさといふ

○たちひ 及正紀云。於是有一井曰瑞井。則汲之。洗太

子時多遅花落有于井中。因爲太子名也。多遅花

者今虎杖花也。

茶

○をとこし 茶をそとをそとの花と万葉集よりあり。色

系和説云。おほらちハ男郎花と云。女郎は花やうま

る花の白なる。人知ふ物に仁和寺。小相文は花は園

已れはははわ。おほらちのハ諸と名付。件の茶をそとをそと

て。保保よさうは。茶は茶。物と云。和名鈔云。茶和

都知 苦菜可食之。孫 於保 字 鏡

酸醬

○か、ち 神代紀。赤酸醬。此云阿箇。我知云。

○かるとまゝ 書家おと見えし。和名鈔加久末引かろけ
はまきそかまきのかくとまゝ葉まといししりかこれ首。
延喜式おのゝと

忍草

こせなまきとさ 後撰葉よはすたはしめれとま
をんまかろよたのむんそかまきとま

萱草

わされま 漢語抄云。和名。和須礼久佐。漢音よ
及まきあまきしりり

○うねへわとま、ま 兼名苑萱草一名忘憂花並
補朔長葉よかへんとんてなまきとま

王薔薇

まきとまきとまきとま

薔薇

秘花 ゆま、さほま 「交とらてまきとまきとま
かたしとれまきとまきとま

驚草

みまきよ 「家言は根よせはまきとまきとま
よまきとま

稻

秘花 とみまきよ 「あまきとまきとまきとま
のまきとまきとま

とまきとまきとまきとまきとま
凡よまきとまきとま

和名

雁来紅 ハゲイトウ

かまづらむ ハ 枕草子よがまづらむをまらむた事なる。
名そらうてけなす。尸のまら花とて文字よハちてふ。
日 かさつら花

射干

からそあふさ ハ 古語拾遺云。以天押草押之。以鳥
扇扇之。今俗しあふさといふ物なる。一日を金
鳥陽鳥なる。一日扇鳥扇とかまづらむといふ。夫木葉
西のよきまらむとあねら雁の肉よかると扇の
なとまらむらん

王孫

○かたうこれ花 万葉集十九引のぬめバ十花つしらうと
戸ノ寺井結る乃かたう糸のふとよあり。仙覚云。かたうと
又ハ井のまらともつ。まらとて。まら花はまらうとて。契
仲云。かたうこと。よまの。花百各結花の。花とて。大サニ
一寸許の花に。まらとて。まらとて。花あり。本草の王孫釋名早
藕とて。まらとて。まらとて。かたう。百合といふ。王孫和名
ツチハリ。又云スハリクサ

旋覆花 ヲダグル

○かまははら ハ 延喜式 并康頼本草類編云。旋復
花 加万豆 伊勢系。かまははら。一山田を。まらつはら
保久佐。伊勢系。かまははら。一山田を。まらつはら
まらとて。まらとて。秋ハかまらと家あまらむ。

○まよひくさ 字鏡

麥門冬

○まよひくさ 万十一引のまよひくさ（和名夜末須介）けけふせてまよ

ひくさ（和名夜末須介）源順云。麥門冬

藪柑子

○山たちまき 古くまよひくさをいひていあひの山

まよひくさ（和名夜末須介）の出ぬり。山たちまき（和名夜末須介）の山

まよひくさ（和名夜末須介）の山たちまき（和名夜末須介）の山

まよひくさ（和名夜末須介）の山たちまき（和名夜末須介）の山

蘭*

○志まき 仙覚抄よりまよひくさ（和名夜末須介）の山

まよひくさ（和名夜末須介）の山たちまき（和名夜末須介）の山

まよひくさ（和名夜末須介）の山たちまき（和名夜末須介）の山

水葵

○なまき 万葉よなまき（和名夜末須介）の山

なまき（和名夜末須介）の山たちまき（和名夜末須介）の山

なまき（和名夜末須介）の山たちまき（和名夜末須介）の山

なまき（和名夜末須介）の山たちまき（和名夜末須介）の山

大凝菜

○こころふと 和名鈔云。本朝式云。凝海藻（古留毛波俗用）

凝海藻（古留毛波俗用）の山たちまき（和名夜末須介）の山

凝海藻（古留毛波俗用）の山たちまき（和名夜末須介）の山

凝海藻（古留毛波俗用）の山たちまき（和名夜末須介）の山

水松

○うみやまつ 尾氏... 松之海よけい... 漢語抄云

大葉美流 俗用之云

竹

○かたはら... 竹を子母ある... 竹を子母ある... 竹を子母ある...

小枝

とらふじ...

川

川玉草 貞侍抄... 秋風... 竹なる松にかさ

知玉草 同く月了... 秋風... 竹なる松にかさ

○お葉 堀河院... 何... 日無此君

○お葉 晋の王子... 竹を植... 何... 日無此君

○吾友 仁樂天... 竹を植... 友とをたいつる奉朝

文粹第十一云唐太子賓客白樂天愛為吾友
子載其言後宋^マ我友と云ふ^マの^マを^マ并^マに
よ^マく^マのか^マを^マ云^マん

箭^ヤの祿^クさ^サー^シ 管^クふ^フ万^マ葉^ハよ^ヨ天^テう^ウめ^メう^ウと^ト寄^キ

ふ^フこ^コの^ノ園^{エン}生^{セイ}け^ケら^ラう^ウる^ルけ^ケた^タの^ノは^ハ雪^{セツ}

中^{チウ}竹^{チク}豈^{シヤ}有^ユ箭^ヤ孝^{コウ}子^シ祈^ネ天^{テン}得^{トク}箭^ヤ多^タ

と^トを^ヲ志^シあ^アみ

生^キ薑^{キヤウ} ち^チち^チ 魯^ロ お^オろ^ロお^オひ

豌豆^{トウマシ} の^ノら^ラま^マめ

胡^コ瓜^カ そ^ソは^ハう^ウ子^シ

昆^{コン}布^ブ い^イろ^ロめ

え^エひ^ヒま^マめ

ま^マた^タさ^サす

う^ウま^マふ^フが^ガき

己^キ上^{ジョウ}和^ワ名^ナ鈔^{シャウ}

け^ケの^ノい^イと^ト け^ケの^ノい^イと^ト け^ケの^ノい^イと^ト

細辛 獨活 莖胡 女青 鞞麻 巴戟 地膚 蒺藜 防葵 防風 苦笑

みらねぬくさ一云ひきねしたひくさ日
けちたら日・のたら字
のせり一云あまあな
かぢぬくさ日・ぬくさ 康本
からう志一云のらえ 和
やひひらぎ日
よそくさ一云まねくさ日
はまび志日・志ろひ志 康本
やひなすび 和
ちますかる一云はひよら日
かまふ一云らみおこ志日

簡茹 羊挑 天名精 澤蘭 續斷 雲實 黃耆 漏蘆 飛廉草 夏枯草 當歸

ねあごみ一云よひりくさ日
いらくさ日
ちまたあさ一云はまふくら日
はまあら一云あまらくさ日
はみ一云ねよねやうら日
ちまさ一げ日
やさらくさ日・よいくさ
くろくさ一云ありくさ 和
そ一志一云ふか、てくさ 和
うろま日
やませり一云おほせり又云うりせり日

催可樂大芥 おぼざうハと云はれしものニせうころゆて

しうやうしと云

秦アキ尤ユウ

つかりくさ一云はうじくさ和

白頭公ゼカイサウ

かきな和くさ一云なうくさ和

蓋草カリアス

かきな一云あまわ和

麻黄

うつぬくさ一云いりま和かつせん和式

知母チモ

やま志和・やまど和ある和字

大青ダイセイ

もとくさ一云くるくさ和大青ハ藍ノ別名ナリトモイハリ

决明ケツメイ

えひすくさ和

狗尾草コウビソウ

えぬれ和こくさ和まもまよ和えぬれ和おの和ころく

ほくもておおくまのまやももむ子無子心章思養忍

貝母バイボ

はくくり和・おひ和字

連翹レンセウ

いりちくさ一云いたちをせ和・あハくさ和

石韮シヅカ

いもれ和くさ一云いはぐ和・くみれ和くさ和

牛扁ウシヒタ

たちあちくさ和牛扁秦尤ト相似テ赤詳トイハリ

篇蓄ヘンソク

うま和くさ和・たちあちくさ和・よ和いや和な和紀和唐和

三白草サンハクソウ

かた志和ろくさ和・かたの和くさ和・うつ和志和

くさ和康和本和

旋花センカ

もやひとくさ和大戟同訓・澤漆和同訓和本和

敗醬バイソウ

ちめく和物産家ニヲミナヘシナリト云リ然レハ和名鈔列ニ女郎花ヲミナヘシト出セリイカニ白花ノモヲヲトコヘシト云是欽可考

白芷ハクシ

うさも和ち和一云和よろ和ひ和く和さ和

青箱アヲヒ

うまくさ一云あまくさ日

杜蘅カアフヒ

ふたまがみ一云つふねくさ和

白鮮クシヨク

いつぢくさ日

白薇クシヨク

こまぢくさ一云くろくさ又云あまな日

やちみ又云くさ字 於まきま原庄もろ ころも

そくすいふる免みなりとぞすのなる一とふふとるふ

壬二をよふとふいふてふ位前めいふとけりとかり ことよあ

目山草白薇生平原川谷と ぬきをと けり

淫羊藿カウリ

うむさな一云やまどりくさ又云よらたけ
とくさ和・くわな字

紫参ムラサキ

ちやぢくさ和

地榆シモカタ

あやめたむ一云えいすね日・そひくさ字

菖蒲イキキ

おほみもくさ和・たよひくさ康本・おほ

とくさ字 西本字 まえをな字 地の字 合字 とくさお

おほくさの あ字 とくさと お字 は字 い字 とくさは や字 とくさえ

おほくさの あ字 とくさと お字 は字 い字 とくさは や字 とくさえ

薺カキ

さきぶさと 一と ひめと 和

大黄

おほと 日

鱧腸草

うまと 日 訓 我馬令来致

半夏

ほろぶと 日・うたと 日

芍薬

わふと 日 和

甘遂

よハそ一云ふし日

虎掌

おほ、そみ日

蕘花

はまふれ日

藜蘆

やまうはら一云志、おくびのき日。おとと

くさ康季

鬼葵

いふれ和

亭歷子

えまたうふ一云あ志まつま又云まよせ日

赭魁

おれと、ぶ日

及己

つきぬぶさ和

大戟

ちやひとらさ日。ぬじす又云はららさ字

鳶尾

こやすくさ和

蕘沙

つ志たま日。たよつ志字古語拾遺云蕘子

高陸

いをすぶ和

菴蔚

めは志字日

白英

ほろ志一云つくみめいしぬ和。ほろ志字

石龍菊

う志結したし和。たつ結字

石龍芮

ふらぶみ和

桔樓

からちり日

玄參

お志くさ日。志くさ式古語拾遺云天押

苦參

くら、一云よし和

藜本

さ、ちそら志一云そら志

酢醬 スイモクサ

かたぢみ和 夫も葉かきと花さかひよあひしるかみきよ

芫蘭 チンクサ

かゞみ日 糸のまゝ結きうみそとよもるをさ

徐長卿 コウカウ

いぬかゝみ日

白前 ハクゼン

めかゞま日

白蘼 ハクミ

やまうづみ日 神代紀に白蘼皮を舟に

茵陳蒿 インチン

ひきよとゞ日

白蒿 ハクカウ

しろよとゞ一云らはらよとゞ日

玉不留行 タマシユウ

かさくさ日

景天 ケイトウ

いさくさ日

菘菜 ソウサイ

はるとゞ一云おほうばら日 菘菜葉を舟に

そらぢ又云とゞ一云うたぶ日 うくいしを舟に

藁耳 ワラミミ

なとみ和 修らば葉を舟に

三稜草 サンリョウ

みくさ日 舟に舟に

ほろとゞ一云とゞ

玉線 タマゼン

ぬまりとゞ 訓義は 一云つちむり日

七いぶやとゞ

積雪草 セキセツ

つぼくさ日

茅 チガハ

ち日 万葉に茅生と云茅草のやと云

と云又俗にをきと云

と云はと云

莱草

志と日 今俗に芝草を舟に

懷香

くれと日 夫も葉を舟に

白慈草シロシラカサ またぶりくは日
狼牙オウゴン こまはる子シラカサ日訓義馬食不 去故名之歟 まままシラカサ

貫衆クワンジュウ およわらびシラカサ日

菡萏カンタン うくとく日
荳草マメカサ いぬシラカサて和まふか...

蒼蕪ソウモ す志日似羊蹄味酢故名之

由跋ユハツ かきシラカサをシラカサな日由跋ハ和國民の説云アリ...
劇草ゲツクサ かシラカサ...

蛇床子ヘビレラミ おシラカサいシラカサろシラカサむシラカサ志シラカサろシラカサ日

万葉集マンヤク 万葉集マンヤク...

たシラカサとシラカサ名シラカサけシラカサ...

莞カン おシラカサほシラカサわシラカサ日訓義大 菡萏 後浦シラカサ...

薺ナメクシ きシラカサちシラカサすシラカサ日

葛英カハキ かシラカサちシラカサらシラカサふシラカサちシラカサ日万十、葛英よ...
沖津シラカサ...

芍薬 おもむらうづら 日

馬鞭草 ハバダキ ともたづら 日 新撰六帖云 玉蕊のあふ玉蕊の山

五味 さねうづら 日 方集十二真玉葛と云う 訓義を免

紫葛 えびのづら 日 蒲萄 えいうつら 結之 日 上

防己 あきうづら 日 和名あきうづらと云う 上

忍冬 すいうつら 日 花吸香而甘故名之 敬

千歳薬 あまづら 日 甘葛 サマカツラ

百部 サシカクシ ほどつら 日 キシカクシハ貝多氏説一説云非と云う

細子草 くろくろづら 日 万葉集云 ちぢ草と云ふ

通草 あけびうづら 日 和 松免のたら 寂然集云 八

前胡 ササヒ こませり 式 頸のよ 結本のお浸と云う 結本云 ことと云う

茵草 ちいらく 日

丹参 よこたぐさ 日

香薷 いぬあら 日

鶏頭 みつそ 日

芋 からむ志 日

熟父 「リカト やいらさ日

附子 「イカト ねう 「ホホ

蛇含 「イカト うつよめくさ日

著 「ホホ めど和

芸 くされう日 六帖歌をばらう「「イカト

きりぼん 「イカト

牛膝 「コツキ かぬくづち日 ●かたひし日

枝木

△木部

やちもの 「イカト 心雲云後抄本註云々

ほつさ 「イカト 田云枝し万ト云是ハ万葉集第十ノうらまひ

まさう 「イカト しらのそ能最本之末能咲ゆく尺云々と

あり契沖碑云けち流布布ホツキヒサキノスエノと云し

またふ 「イカト 和名鈔叔楡和名源氏浮舟の末云

あつ 「イカト ちをれ流るてつめをさくし

あぬ物 「イカト ちをさくし

○水え 万六 「イカト のひよ水枝きーとよあり 同安よ水を

ハ枝人の子を水とら

梅

書教見草 花玉回一山さの軒端よ雲かこころい

書ちへ草 花玉回一山さの軒端よ雲かこころい

書ちへ草 花玉回一山さの軒端よ雲かこころい

書ちへ草 花玉回一山さの軒端よ雲かこころい

冬梅

初名草 花玉回一山さの軒端よ雲かこころい

梅つと花

櫻

花の見 花玉回一山さの軒端よ雲かこころい

他名草 花玉回一山さの軒端よ雲かこころい

花玉回一山さの軒端よ雲かこころい

花玉回一山さの軒端よ雲かこころい

花玉回一山さの軒端よ雲かこころい

暖草

まろめ

はせゆま 一のまけ草の花

色あけぬ梢よかほまじり

かどにまよ 風もあそぼほのまのこら

のまのこら

七よひまよ 風もあそぼほのまのこら

乃まよけ

柳

招小葉

川まよ

用ま草 一のまのこらあそぼほのまのこら

とまよけ

川まよ 一のまのこらあそぼほのまのこら

桃

風ま草

あはれゆま枝梢よ風ま草乃まけとまのこら

ひまよ

あはれゆま枝梢よ風ま草乃まけとまのこら

あはれゆま枝梢よ風ま草乃まけとまのこら

あはれゆま枝梢よ風ま草乃まけとまのこら

あはれゆま

あはれゆま枝梢よ風ま草乃まけとまのこら

あはれゆま

あはれゆま枝梢よ風ま草乃まけとまのこら

あはれゆま

躑躅

いさ志と 昔は遠く廣徳のあたりにありて

一花のこころを花の心とていふも

葉中

火とくまふ 花を秋の空におもひて

火中

火たきまふ 花の心は秋の空に

火とくまふ 花の心は秋の空に

火とくまふ 花の心は秋の空に

茵芋

○よつーじ 花の心は秋の空に

おほくし時花とて花 上下界とて

萩

○みつーし 花の心は秋の空に

よつーし 花の心は秋の空に

李花

むめつとを花 花の心は秋の空に

梅の心を花とて

卯花

ちつとくさ 花の心は秋の空に

花の心を花とて

昔の心 花の心は秋の空に

らてふまゝハ

垣見草 日 垣見草花の葉をくわ

聖 聖の宿

道 日 道に似たる

反香草

○おはまの花 日 けき名一書よりしり 拙より書きては既

口決云 軒花は若くは若くは若くして字たさうとたま

うそて東の軒の方なまもそ東よりまふむかひの軒乃

花といふはけは小くは奴

棟

香草 美 軒をまふむかひの軒乃

ととてこれぬ

橘

庭草 日 引急かきし以公若くは古きよはるる花の星を結ぶ

香草 美 代をきて宿にあまの昔まをなつしと神指

○香果 カクノミ 垂仁紀云 九十年春二月 天皇命 田道間守

道常世國令求 非時香果 今謂橘是也 カクノミ まま

老きよりかみのらばはてはしるるては時を叶はせまひ

紅葉

色 唐 秋もを花志とてははるるまらちまをてい

心 日 せそふく

葉 日 小くは心志とてははるるまらちまをてい

錦 日 錦

半 日 半 日 半 日 半

ふれんぼ

龍田草

林田 のふらうハ

楳

一葉草

梧桐一葉落而天下知秋

うー

椿

○あをさなつな 八雲出紗よをあをさなつなといふ長

安のを樹がなつたふと似たりとく類歌に椿葉付歌

ふとをさつたふとをさつたふとをさつたふとをさつたふとをさつた

松

○子母木 月つらん百万代経きとるしうれをせよの枝

秘花 落きとるし

延本草 花玉回し 春日やわおけの海力むさふ

咲みたり雪しおんね

延草 月をわさるし代をさるし代をさるし代をさるし代をさるし

うら花ハ咲とも

草 花玉回し 河をさるし河をさるし河をさるし河をさるし

風も反かたの時よそあき

初見草 月をさるし月をさるし月をさるし月をさるし月をさるし

名ハさつ

子代草 月をさるし月をさるし月をさるし月をさるし月をさるし

内洞をのなれ

草子代草 花玉回し 月やきる植る時をさるし

久しとさるのなよなま

美
翁草

曰一信吉や岸花わらう花翁草なるかゝて見
る人を神々花翁草とて花翁草と云。信吉のまは正小翁よ子位乃

相とつるまわう。彼花年ふりて翁と信して位なる翁
よら翁とてまわうてまをまはく人多う。彼翁草翁草の翁なる翁

花翁草の翁とてまをまはく人多う。彼翁草翁草の翁なる翁

色
喜草

秋秋のさうね

めさめのさうね

秘
草

一草はらわらう一草は

秘
草

ねらうのあはらう

秘
草

お枝草

秘
草

かたのさうね

秘
草

はらわらう

秘
草

山家のさうね

秘
草

神や枝草と云

秘
草

松の事と云

秘
草

山のあはらう

秘
草

一草はらわらう

秘
草

川をわらう

秘
草

よらうのさうね

アノ松を日向草と云ふ也。アノ松の昔と云ふは
他是抄曰其採葉亦大方葉形を指して日向草と
いさかり昔といふものなりといふ。是は英傳抄乃後
同

門松

石玉 初代草 大内也。是は山内初代草といふ人よみ

てつらん

檜

さ紀くさ。山内むつとささたりと記すはよき
よ後片をさす。是は備馬樂呂のまろし。松葉のまろし
へちまらぬおなれと云ふはよき。よの後片をさす
いふ。河海抄云。女房名奈松。結いねをさすといふ也。

しんをさすはあまをさすなり。古人多し。まはささるさの松と

いふ。但し、英沖は、和名抄より所謂サキナ葛の葉といふは

櫨

石玉 二回草。英傳抄より一は回し。大内也。名もむつらし。

うらをさすは家片をさすかきをさすといふ

二回草 同。山内むつとささるさの松といふは

まよふは花ハ後なり

石玉 三回草。和名抄より云。或は後より和名よと記すといふは

石玉 富草。幸草中とあり。さ紀より一名とみすといふは

和名抄より葛サキナ日本紀私記云。福草。草枝は相
値葉は相當也とあり。そのれを幸草ともさすといふは

石玉

杉 杉 志つらハ捨た事ハあり 杉木の根いつく列は板をぬ
いそ木 大井川にも木は茂るもなる 杉木をこのて
つわちうして

樅 樅 ○おみの本 万葉之に云向のとはしむるを人よりを臣本
とおいつらうしくともあり 契沖さこの本とていふ

柏 柏 やむらて 神樂まよむむてたのみもするさるていふ

楊梅

秋梅 なつかも

梨子

○あまのこ なしとも泡をきてあつのこととらふてあふ
いふわいさるていふていふていふていふていふていふていふ

柳

柳 多かりささやかとありてこと人のいふ
玉くるいのを さしはまよふな神宮の柳を串とていふ

岸のあまふ玉くるいとあまていふあまなるての柳を
玉くるいとあまふいとあまていふあまなるての柳を

さしはまよふな神宮の柳を串とていふ

杠谷樹

秘花 とこせいいらもていふ 梨木をさるてい方のかげは美あはれ
ともあしあるるもさるていふはいらもていふ

文武紀云 大寶二
年二月丙子造宮職献杠谷樹長八尋ヒロコ俗曰比

良木ニタと載らる

ハ不審なり。黄芩ハ草止。本草綱目ハ黄芩山草部ニ載シ深増ス。和名鈔ヨリク。本説黄芩と載セシモノハおなほともひつ本のものといハ
いしとそぞふといふを引く。げちま本葉よ出く。為家このあししいら本とあるを俗稱なり。但し色よ出てハとよかりしうりうり。むらあを常葉本とされハ
おなほあしとあしといひ。きき飛いらも本といへり。いらハ苛
なり。そぞよ刺あるといふ。むら本とハ疼木なり。きき葉の刺よそそせむヒラクをい。疼ヒラクとよえり。

讓葉

親子草 飛玉回一

痔瘻

石楠草

人よまじりた花や多し。齒葉を親子草といふ。後れ
まじり傷く葉といふ。よよら。父子お續の義をとく。
親子草といふがらう。

○くまむさ 和名鈔云。和名止比良乃木俗云佐

久奈無佐。義考を葉云。のりよとさくかんさうを
又とむらした能きよいといれむさ一の葉はゆの
アヒ人せとてん色

○こむらね本 亭義抄よま。山寺は南がきてよ石楠

そよ結あしとそぞ。あしハ知り。結へちやとさひをれ
そとむらね本となんやといひをれ。坊主結よあはし

冬。契冲師云。和名鈔寄生。和名夜止里木。一名
保夜是なり。ヨトヤ通

松茸

○松の花 冷泉中納言為孝マ説云種よりあり

梢

こぬき 万十九長歌足川のらえ木末もまされをー

茶

ーしるも木末とやう木のうまといふべきをノウの反又

なまを本ぬきといふこうもこまこ上なり

とふさ 万三鳥總立号柄山尔船木伐とも十七よ

とふさたて船木さうさふのと結志中うとらめう。本を

切老本結末をそ本の切ふよとて。山神樹神をなす

をりよといふ

茯苓

まつほど 延喜式典葉卷より中。汎我松陰似。

日本紀より前伝を陰と志と

松球

まつぶぐら 大鏡五云竹尾大ゆそ小松ぶぐら

やうこのをく付てなりとて大鏡使より松風小ゆら

尾を布松ぶぐら

まつあさ 松葉集より松の松をハ一ツ

あさまつといきこのハ一ツ

△補

榎

きさ 和 松葉集松名歌きけ松木のあつらへる 蠅をささ

とらふげ本の文柑よ似る松名付といふ

椴

へく松き 木可為笏也云位山松櫟を笏より松

いふらばは俗に説なり〜

楓

桂

朱櫻

をうづら日

めらづら日

はたれ一云ふをさくら和 古事記上云。取天

香山之天。婆娑迦而之異同之考 六帖一録と

よぬをくやとふし休丸花ちぬとよもよ水て

柝

据

柝

ゆき又云をはろ和・なはらぬは 字

つと和 甲斐郡國つこの中敷は〜日本書紀の名なや

片み日 万三「い〜」とやかろ人となつせと〜あら

ゆ〜つとぬおも

枸杞

ぬミぶすこ日

蔓椒

いたちを志ありみ一云ほそ子に 皇極紀ホソキ

洲又ゆ。菽木系連のよこのかぬよいつとら〜あこ

をへて〜ぬと〜とらぬよん〜と〜きけ

呉茱萸

かまはぶらみ日

食茱萸

おほたら日

厚朴

は、かま〜日 万十九「あせこのさ〜けて〜ほほ〜

〜とあ〜と〜と〜のあを〜た〜ぬ〜

藥

槻

むくれよ志〜日・まめふ志〜又えむくれし〜本

つきぬき和 まま「園」のつらよ〜と〜し〜ぬ本のつ〜

せぬあ〜わ〜せ〜ら〜め

木瓜

もけ日

羊躑躅

いもつゝ志日 直江書所記を「すわい」あねを
ひそしよきいを「し」花候まを「さる」いふ

山榴

あいつゝ志日

槐

あよす日 今俗エニジユと云

樗

ぬで日 今俗謂ヌルテ、堀川を「ぬで」いふ

櫨

まねなるけりぬを「まね」いふ

あまき日 古事記阿波岐原之、後古くよ「おれ海や

あまき」いふ、おれ海と云ふ

松稜

うはれき日 仁徳紀大后清歌よみきり、松稜よよ、その

あけいたまきこころを「あけ」いふ、おれ海と云ふ

いふ、おれ海と云ふ

對骨木

穀

かち日

古語於送云、天日鷲神、津岫見神穀木

蘇鼠木

種云々、又かち穀あまき云、方十にあり、かち穀を

けらめかち穀本乃と云、今俗よ云、かち穀を

杜仲

まいまゆ日

衛矛

くそまゆ日 一云かたくまつゝ、ら日

蕪夷

ひき林くら日 櫻發

榆

やまれ日 今俗ニシとのこら日

石檀

とねりこれき日 穀木を「とねり」いふ

陵苔
まかやうき一云のせう日と俗のうぜんうつらとふ

五茄 ウニギ
むこま日

賣子木 チヒヤノキ
かさちさたき日・なさとたき康本 一万世系と帖

鶏冠木
あついでたき一云かへるでれり和 万の家

黄變蝦 モミヅレカハデ
常一黄變蝦は同十四のちらふわらかつてたき

接骨木
みやつこ本

金漆樹
こまあぶらたき

烏草樹
さまふのま日 古事仁記磐之媛皇后歌袁

佐斯夫能紀斯賀斯多途徳 斐陀テ流上下 厚顔

あまツ小鳥草樹己之下生立なる 山中サ老ハガ

セホサ本と云ヒサキキと似く実践結ふは系連をし

女貞
たづたき又云ひめつむき日 堀川池は名百とた

後のあまとひお目をはらるるときうしとまるるうらひの花の葉の影の

莽草
まきみ日・まほこま

黄芩
ひ、らと和・まし休のまき字

木蘭
もくらと和・くるとむま 康本

蔓荆

をきはし和

荊

なまえ本曰

蜀漆

やまうつと又云うらひま本いし本曰 康頼

草多本終一載也

木天蓼

わたしび曰 俗云まろしび

稗

ねすみもち本曰 穂多まよふとぬさもら本

なま〜

〜

お〜

〜

釣樟

るぬぞ曰 舉樹同訓 日本紀 歴木同訓 万西

辛夷

川

やまあら〜

さくら又云 志たまら 宇まも

〜

〜

和學

東雅書林

和學
短大
第 6406
受人
36 3. 14

文淵堂一九二九年九月十三

和學

和學

十

出

出

日

